







成立路的女主

二月

号

Pensoj flugas trans la land-limon The Senryu Zasshi

No.285





## い 朽 洞 賞 カ ツ プ 絵と文 種

瓜

を談するとなると俄に熱弁と す。句に必ず美をプラスした なるのもうれしい。 いのが私の態度です」と川柳 しく見るよう 努めていま

ででもある。所謂弊虎傳中の 强い信念がある。そして酒豪 男のようだが、鋭い眼や頃に にテカテカで離れて見ると優 お顔はいつも南京豆のよう

われに強く怪のうまれくる

家の名を書いて流すそう天王寺へ月参りして亡き川 経木を二百枚余り買溜め、 経木を二百枚余り買溜め、四ている。信仰心が篤く、常に 盛である。芝居通は衆知の通 集を出し、 あれば読み返すそうだが、過 つくりプロデューサーをやつ り。職場で"劇関あゆみ"を 吉川英治の宮本武藏を暇さえ とはりきるあたりなかなか旺 去に「ひかり集」其の他の句 受けついでいる人だろう。 麻生路郎師の柳魂をそのま 今年も川版しよう

うどゆう。そこで筆者は注意 魚の名も書いて魚族の霊を弔 ようにねし ペンネームを経木に書かない した「鮎だけは釣らないよう が、釣が好きなので、ついでに になさいよ。うつかり自分の

川柳相合傘組

頭が大きくて、禿げ頭でもな を破つていると思はれるほど いのにいつも衛生的なクリク はやめたはずだが、少し均斉 生路郎師に「坊」の字をどつ て貰つてから、坊主らしい名 昔香林坊といつてたのを麻 新谷 句会 武部 香林氏

らいなら、どうして頭にもマ のに年中マスクをかけるく IJ 坊主。 胸を病んでもいない

優勝リポンにその名をとざめられ

(編献局

れる。

「どんな汚いものでも 句にも美しさが窺わ

優しく、

キツスである。ペンネームも

に設けられ、早くも武部香林氏が

彰し、不朽洞賞カップを贈呈した

氏の敢闘振りを新春句会に於て表 ったが、三回優勝された水谷鮎美 者が無かったので、連続ではなか 以上の成績により、三回連続優勝

に領つた時ちやんどキッスし ておきましたからね。黄色い

でしようね。と問えば、さき は、三三九度ほど嬉しかつた 二月

水谷 鮎实氏(九月)

正司氏(十月) (十一月)

香林氏〇十 浪玲之介氏

5.

50

受領して一杯やつた時に カップもさぞ本望であろ 三司氏(六月) 須崎

(七月) 赤谷鮎美氏

(八月)

石岡

寸の侵水に遇い、まつ先にカ

ップを持つて逃げたそうだか

豆状氏 長谷川

x

ン台風の折、床上二尺五

尼崎に住んで居るので、ジ

金泉万樂氏(一月)

中島生

や頃に强い信念

鮎美氏

(川月) 総山崎暴氏

(四月)

優廿五年度

鮎美氏

鄭々氏(五月)

施氏(二月) 水谷

★廿六年の一月、

不朽洞賞杯が新

りますます抹香臭い。僕ひそ なるどつい頭を振り出すあた スクをかけないの 石塔の話に かど思われ

な人格。 もよくお見受けするが、アプ ステートフェアで既に試験済 の六月、 レ商人の眞似も出來ない律義 ね。しかし川柳不朽洞会の副 でなく抹香ミ かに思えらく、 事長としての腕前は一昨年 工業用顔料商で商賣の あやめ池で催された した方がいう これでは香林

は絶対に作らない。川柳即生 時中室襲下の 活です」と言われるから。 「自分の生活からはみ出た なし 焼けるまて吾の手入れ に余 戰

るの の句 id 美むべ き落 着きであ

徴の一つ。 句帳に登録して帰えるのが どんな用件でも 2 手帳兼 特

さんの方が十八才から作りは らズンを古いっ じめて、三十四年間とゆう

句作に余念なし、とゆうとこの作に余念なし、とゆうとこ ろもお羨ましい生活である。 麻生路郎師夫妻を同じ川 妬けるまで夫婦\*

30 り、こつちの路郎が たが、 別号であるとは知つ が、不死鳥は路郎の 考え方もあるのであ の方であろうと云う るのはそつちの路郎 どにならないもので ちの路郎が作つたこ い句がこつちの路郎 らの路郎の作つた巧 で文句はない。そつ 路郎どつけたところ ていながら、その男 た。別号どころか、 議も何も云わなかつ と云う頼りを寄越し につけてやつたのだ つたことにな 私はそれに抗 句がそつ 損をす

私がうまくなつたら

柳舟と云う小器用な と思うが京都に池田

が、それを大分縣の らわれた。ところ と云う川柳作家があ が、何ンとか不死鳥 分縣だったと思う を書いて見よう。 短冊を貰つてよろこ **加よりもまだまづい**のに、そ らまいたものである ると云つて盛んにば 似て短冊をなぐり書 かろう。ホントに こばしておくのもよ ぶような人ならよろ めなかつた。私の短 が、これも私はどが 柳舟が私の筆蹟を置 路郎の短冊をや

まあ、 夢ハガキだつた。神 資薬の廣告川柳の應 ら一枚のハガキが出 経質なら君はそのへ た。このハガキは某 珍らしく手紙が届い だが、柳友のらから だと云つておこう。 たらざるを得ない。 ど云われればじくじ これは近ごろの話 死ぬまで勉强

かえ行つしまつて、 けて、そのことすら そのハガキは返還し 家の住所を紙片に写 故、その九州の投句 忘れた位だから、写 が暮の忙しさにかま た。B君からは私か しどり、早速ら君に ねばならぬどのこと て通信せよどあった いたとでも云つ

表

紙……山比遠三郎

いるの。 は明らかに相違して しているが、 子か兄弟ほどに類似 次と路

あった。私の麻生幸 電信局で外國電報の 年で、私が大阪中央 戦勃発の頃の大正三 それは第一次世界大 郎と云う人がいた。 檢閱をしていた時で 曾て日本銀行大阪 長に、麻生二

Him

麻 生

郎

題にはならない。こ いるので、これも問 人が幾人もある人も

・ 麻生、名は次郎、雅 おは滋浪と記されて や雅号が気がかり れたのである。 ハガキを同封郵送さ な手紙となり、その もかかわらず、親切 で、歳末の忙しさに

どに勉强しなけれ

ばならないと思

0

らずが、これは偽物 私の作品の一枚 てしまうのだ。 はみんな獲物になっ 私の書いた拙い作品

残

ですと云い切れるほ

そのハガキは選句

0

方の麻生路郎を親

えるほど上達したか な大それたことが云

今日そん

その住所を知りた 麻生次郎は私の雅号 似音であるから何ん て雅号が私の号に類 いども、交渉を開 空しくしてしまつた S君の折角の好意を ども思つてはいない なんて云つてやろう どか改号して欲しい しかし私は決して である。 なるほど 5

そうである の主幹で終焉を告げ に縁のない「川雅 幸の字のある私は金 の人は後に日本銀行 麻生次郎の滋浪 総裁になったが、

そう考えると、まこ どに愉快な話 親戚かも知れない。 であ

春 小說・將軍娘(四)…… 獲得者の横額 昭和の作品から(1)…麻生新川柳評鑒百句 リレー階 川柳四方山座談會……尚 語 詠史川柳「につほん」…月田 隐者川柳大会……藤本 夕刊山陽劍刊 狂句論の再檢討…… 源 0 探 逝 · ..... 究(引)…淡田 口……麻生 一周年 山路 安川久留美二〇三 石原 Щ 古方…(八) 支部…(二) 路郎…(四) 海年…〇〇 路頭…(三) 瓜平…(三) 青窓…(か) 右門…〇一 閑古…(10)

二郎の幸がない人が

一、二丁先にいたの

に驚いたが、

同名異

同 111 不 動 各 課題吟一洋 近 **杨嗣** 料 地 舟 作 室 柳 柳 近 柳 にて………… 壇… 館」……寺井銳々選…(え) 梅… 塔…… 靜 ……諮 麻此路所選…(三) 麻生路鄭選…(心) 家…(二) ....(10) ····(111) (3)

も遠く遡れば、私の

### 柳川 MANUAL STREET



(I)

る。摑み得て妙。

締めたろと見たら卵を生んで

(琴四)

である。

タから兎や角云うには及ぶまい。大いに煽ぐべし 煽ぐこどによつて愛の深さが味えるどしたら、

### 昭 和の 作 品 から

## 脉 郎

る。「エイツ、いつそのこと締め

と喰べるので、

胸クツが悪るくな 餌だけはキッチリ

腐るからこれも喰べとく肥りやう

ツキリどこの句から感受させられるのも面白い。 腐るから喰べとく女性心理を腐つたら捨てたらい などは冬に味読するよりも、夏に味つた方が、 肥つた主婦が台所の隅で、タラくど汗を流しな ない深い味を持つている句だと思う。でツぶりと い、喰べたいだけ、喰べたら残しとく男性心理をハ ら」が特にこの句に季感を賦與していると思う。 唇ピンミ來るのではあるまいか、上五の「腐るか がら食事している姿が限に浮かんで來る。この句 面白い何であるが、アハハと單に笑つてしまえ

# 幸じて住む東京をうらやまれ

新聞や雑誌やラジオや映画を通して見る東京生 星)

> いそうな顔した鷄の尻のあたりに卵が一ツころが 5 種の諷刺がひそむイソップ川柳ででもある。 つていたと云うのである。写生句でもあり、或る なんのとつた。「ヘイ只今うみました」とい たろ」と荒々しくトヤをあけた

# 亡き母の煙管を持てば詰り居り

者の実感句なのである。 である。中陰を云う前書がついているがこれは作 が轉がつている。フト手にどつて喫つて見たが、詰 前に坐つて見る。そこには母が使い古したキセル 廣くなる。<br />
亡き母がいつも<br />
坐ついていた<br />
長火鉢の つていたと云うのである。ホロリとさせられる句 母を喪った人生の寂びしさは、急に家のうちが

# 煽風機の代リを要がまだつとめ

没食子)

的であつた東京だつたのであろう いか、この句主も含ては、憧れの が、遂にかくは喝破したのであ 人があまりにも多いのではあるま 句が描出している辛じて住む東京 実際生活はどうかと云うと、この 活は羨望の的であり得るが、サテ されている。「まだつとめ」で男女同権の時代思 階級の家庭では、今なお頗ぶるあたり前のことと かも知れない。ソヤノ、煽がせて満足して居り、 ている女の平凡な幸福をひそかに謳歌しているの 想を無視したことを諷すると共に、それに甘んじ お酌をしている図であろう。夏の情景をして庶民 猿肢一つで飲んでるのを、妻が横から煽ぎし

# 名曲か知らねど夜業腹が立ち

何遍トヤをのぞいて見ても卵一

がこの句である。 はイラくするばかりだつた。そして思はず手に か知らんが、腹のたしにはならなかつた。彼の心 つた。斯うした瞬間的な心理の動きをどらえたの していたペンチを壁をめがけて投げつけたのであ を休めた。寒さとひもじさが、彼を襲つた。名曲 窓のガラスをふるわせる。ああ、ど彼は夜業の手 ーベルト作曲交響曲第八番ロ短調、「未完成」が 夜業の灯はほの暗い。となりの喫茶店から、シュ

# 葬儀の短かさ犬もついて行き

あろう。そして、その葬儀のあどを一疋の犬がよ びしく物悲しい情景であるか、これまた想像に難 ろめくように蹤いてゆくさまが、どんなにか、さ 葬儀がいかに寂しいものであるかが窺い知れるで くないであろう。亡き人の過去が、この葬儀にふき 。葬儀の短かさ」と端的に投げ出した表現で、その

までもなかろう。

# 働いて取れと資本家折れ合はず

(女 蝶

金詰りは深酷になつた。銀行はあつちを向いている。労組にどつて唯一の武器であつたストも、もう資本家を脅やかす道具としては力が無くなった。労資の対立は何時まで続くか。この問題のカだは「働いて取れ」と云う資本家が握つているとぞは「働いて取れ」と云う資本家が握つていると

# オイ風邪をひくぜと男から折れる

(伍健)

男と女の世界のいざこざぐらい微妙なものはない。弱いようで強いのが女の意地である。强いよいようで強いのが女の意地である。強いよい。弱いようで強いのが女の意地である。強いよい。

# 子猫ぞろくみな宿命の顔かたち

(生々服)

れる二号さんの膝え落ちつくのもいるのである。れる二号さんの膝え落ちつくのもいるのである。 なんしと歩い ているうちに、それといの姿態による宿命で、もらわれる先に、それといの姿態による宿命で、もらわれる先に、それといの姿態による宿命で、もらわれる先に、それといの姿態による宿命で、もらわれる先い違つて来る。 うちでは猫に鼠ど捕らさない。 猫が悪くなるからと云う作家の宅え貰われてゆくかと思うと、玉やくくさ人間以上の扱いをしてくれる二号さんの膝え落ちつくのもいるのである。

# お祈をする黑製の長さかな

(茶 単

黒髪の美を、こんなにも美しく印象的に詠んだ

短歌調の句とじてすぐれている。 感じが、巧みに表出されているのもうれしい。下五 の「長さかな」の「かな」の措字も無駄でなく、 の「長さかな」の「かな」の措字も無駄でなく、

# 更年期內科外科齒科忙しい

(W)

一家が古くなると、壁に穴があく、屋根が漏る。 戸や障子がガタビシする。人間も更 年 期になる と、あちこちに故障が出來る。莫加々々しいが仕 方がない。癌やないかしらんこ內科をのぞく日も ある。手術でせなあかんそうやと外科え走る。ボ ツーへ入歯でせれば物の味がないとは、あわれば かない忙しさである。斯うなつては色氣もクソも ない。

# 音の良いおなら乳吞む見も笑ひ

(齊 花

母親の膝え、振分に足を投げ出し、片方の乳房を毒びながら片方の乳房をゴクン / \吸い続けている時、ブーンと一発放したのである。それはいかにも朗らかな快よい音なので、子ども自身も思わず笑声を発したのである。おならを詠んだ句では古句に「お前等は何を笑うと隱居の屁」と云うの方あるが、おならのような下がかつた句で、これがあるが、おならのような下がかつた句で、これがあるが、おならの句などに、今後神経を費さないがある、おならの句などに、今後神経を費さないがある、おならの句などに、今後神経を費さないがある、おならの句などに、今後神経を費さないためる。

# 天誅か税吏が醉つて川に落ち

(醉月)

税吏ぐらい憎まれたり、嫌がられたりする職業 が同列に扱はれている。春秋の筆法で論ずれば、 が同列に扱はれている。春秋の筆法で論ずれば、 が殺したとも云えよう。この句では酒に酔うて誤 が殺したとも云えよう。この句では酒に酔うて誤 が殺したとも云えよう。この句では酒に酔うて誤 がないただも云えよう。この句では酒に酔うて誤 がないたったろうど肯定している。飲んだ酒も自 かではたいて飲んだものでないことを容認 している。そんな税吏ばかりでもあるまいが、こ の句は所謂稅吏に一矢を酬いて、その反省をうな がしているのである。



其他食堂用紙製品一切 アイスクリーム用紙コツブ

フタバカツブ株式會社特殊紙器工業株式會社大阪市阿倍野区晴明通一丁目

二八〇三番二三九一日





吳庫縣 卢 倉 天

就職難理科も運勢見て貰ひ 舞の手にめがねかけたり外したり 秋寒う共同便所も聞へたり 京の無妓を見て 奈良縣 田 翠

標準語だけでは愛はさゝやけず つれなさは切口上で答へられ 女房の視界の中にある呉服

時間表五十九分の着があり てれかくしいやな女給もスナップし 平塚市 孤

負ける事にもう慣れて來た五十七 衣食やゝ足り老のうつろなる 新調に他人一向振り向かず 天皇の帽子に天皇苦笑され

文化とは遠く古靴増えるのみ 長生きを語る追放解除組 別居する弁仲のいい画家夫妻 本の中で暮す理想に手が届き \*池田市 田 古

みんな消えてたでと夜学から帰り ベビー・ウィスキーなんか御存知ない身分 鍵袋首からさげて忌引明け 人間くさいどこにポン引ポスおかま

> 恩人のオの字も口にしなくなり 日曜日西洋料理はわしがする 日本人儒化法案米國会を通過

訪日團散つた櫻の木を見上げ 仲直りすればどつちも阿呆だつた 疑ひが晴れて養子を籍に入れ

そんな事ない御身分に貸が殖え 金つまりどすえぶつつり御越しなし 自惚れへ淋しい氣持ち丈け残り 落伍したみじめさよろしの夏の服 京都市

秋さらば大大阪に暇乞い 大阪より京都へ移轉 大阪市

光

まつしろなうでがからんだまゝのあさ べつべつなことを考へ差し向い 死にいそぐふたりへききようおみなへし 大牟田市

浪

スト賛成戦後派らしい娘が叫び 経営の穴に去るもの追わぬ主義 佐賀縣

え

を

秋晴れへ火葬場のんびり煙り吐き 奥様と呼ばれ考慮うろたえず 久々の上阪

大阪のゴミの一つに今日はなり

大阪市

市場

沒

食 子 横浜市

山

雨

足袋はいてさて元日を何処へ行こ 謹呈の袋にメモ ミカレンダー 医者も亦代りやとうて寝込んでい 学友の二三は既に孫を抱き 名古屋市

車

方

わが庭はすべめのとまるとこもなし 水

北

山

豆

囚人になつてむくく一肥り出し 代議士の徽章おつちよこちよいに見え 轢かれても忘れず一句吐いて死の 大阪市 內

死にたがる女のそばで餅を焼く 振袖の下で時計のねぢを巻き

月の色女に青い影を置く

女医さんにやんわり酒をどめられる 小説を読んで益々人嫌い 税東募集役得ありを書いてなし

配美秋君本復

厚司着てから本復の顔になり 奈良縣 尾

方

Œ

妄

謝恩会恩師の笑顔寂しさう アマチュアの盗量額ですべり込み 借金の帰り木枯袖を撫で

くたびれたデャンバーが知る暮し向 阿山縣 大森

來

逸

ポケットの多さ女をあきれさせ 大根の白さへ八百屋灯をどもし

新年号師走を待たで破れ散り 眼をおう記事ばかりなり子を思う 之 助

日記書く樂しみ恋があればこそ 老らくの恋をうらやむ年さなり 二階まで貸して貞操うばわれる 捨てられる予感逢潮がへつて行き 恋盗む友と思へば逢うも嫌 大阪市• 竹 莊

アベックの憩岩かげ許りより 十二月いけるどこまで行くつもり 赤月四十八滝にで

信念がぐらついて來た生活苦 刹那主義男に未練など持たす 囚人の手錠冷たき朝のバス 師の影を踏まぬ镁で育てられ 佐 野

八代市

占

市

布施市 本 醉

世をうれひ國をうれひて吾喰へか 自由主義長屋に國族もこゝかしこ 道義低下犬は昔のまゝなるに 大阪市 田 斜

水

喰べられぬくせに大きいのをせがみ 道徳と規則になやむ日もありき

失恋えやつばり貧はひがんでい 岡山縣 分 淑

郎

又主義を変へて帰つた十二月 又一つ嘘ついて來た十二月 お土産に落葉を吳れた娘も老いぬ

大阪市 渡 辺 孫

掤

初恋で知るも知らぬも秋の風 もうくなど受けどれる程の口上手

太阪市 岡 淡

舟

うかりくと過ぎ厄年となりにけり 満ち足りた顔かな孫を戲れる

奈良縣

飯

降

白

否

竹 青

あいびきもいゝなどおもふ霧の夜 人物はよくても情実には勝てす 辻

就

誰が呑んでるのかスキ焼の匂 君が代の是非なんか吾れ働かん

軒貸してその賣上げに氣が動き 千円もする釣竿で海豚を釣り 山口縣 野

井

蛙

汚れたど言はず女になりました

**慶返りを知らず一升置いて行き** 素晴らしいとは混浴の宿に來て

京都市 間嶋

木造りの鋏の音に限をさまし 祝盃へ妻は矢つ張り台所

大阪市

L.

田

柳

退屈か客車の番号読んでゐる

岡

TE.

司

月

灰色の煙り真夜の葬儀場 枕さやは白し故郷の匂ひする 死んでしもたるさかると娘だだをこね

友

御座敷のダンスは抱いたまってよし 招待券妻は勝手に行てしまい しりからげしたは藝者のダンスなり 鑑賞限あるのが裸婦に限がすわり 子供もう飲み屋の借の嵩を言ひ 大阪市 淵

誤解とけ男同志は吞むさきめ 幸福の限界スラム街にいて

布施市

ボーナスにココアを花を買う若さ

肥えていると言へば女にどやされ ほんとうは女にされたを嬉しがり

資本論が教てくれた剩余價値 尼崎市 忠

中立を支持する程度かを言はれ 権力の前にはもろい眞理なり 大阪市

里

折詰をお預けにして祝辞さく 身の上を聞けば惚氣が七分なり ヒロボンに明けカストリに暮れる、街

時々はぶつても然しいらしい妻 にじり寄る娘心のいちらしく 汽車の揺れ任せきつてる娘の姿態 岡山線 直原 七 面 山

青 丹 子 光 なわ飛びへ家の子許りなわを持ち うばわれたキツスへ女悔もなく 四十五妾稼業も板に付き かみついて見たい乳房がそこにあり 水臭い仲へ子供が生れてき スペリンコ祖母へスペレミ兒のせがみ

山 聖書読む若き牧師に見惚れたり スコップで無情の灰はかき出され 棺桶の値ぶみお通夜で叱られる 兵庫縣 石

生きてゐる人が目当ての通夜の客 地球をば血でぬる~にする氣かや ギブスの子へ淋しい夜がやつてくる 次女英子(三歳)手術を受く 大阪市 花

村

醉ふたんで言ふんやないと念を押し かゝる世を謂へ死にたくはなかりけり 頑張つてもらふ晩酌つぎたされ 斗酒あへて辞さず胃散を持ち歩るき 見を抱いた父のまはりを掃き残し 鳥取市 日 満 子

いりがらも食べてお乳の余る嫁 稻を刈る子の手助けへはらくし 女事務ばた(~~と嫁に行き 知らぬ事知らぬと云つて氣が安 兵車縣 花

廻診の食慾だけを聞いて済み 女部屋なのに灰皿ある生活 焼香の順をくるわす雨が降り 滋賀縣

美

ひまそうに見えるは子守ばかりなり

満場の諸君三名へ呼びかける スパイクの欲しい子供へ母默し アベックに踏まれてばかりいる落葉 逃げ足に自信をもつた油虫 ハンターの腕猟犬はくやしがり 士族出の姑アッパパも着る

紫煙見詰め下手に口説いた事を悔 雀にはら08の雪が降り 如

今年こそ心機一轉する積り 正論もアプレゲールに揺すぶられ 德島縣 田

心臓の弱いを知つて借りて來る 悪しからずなどで借金断られ

良民の長い煙管で吸うされず 岡山縣

金貸した上に燒香までさいれ **箸持つたまゝ停電へ默り込み** 吞めば寝るくせ妻は物足らず 私でも間に合う判を頼まれる

奥様のおしやべり標準語は忘れ **霜降れば菊にも屋根があるものを** 一輪ざしこけたを母のせいにする 岡山市 茶

岡山縣

黑田

久

米 女

こうしでは居られぬ暮の火鉢立ち 歳の市え」なくこ見て帰り 年の暮れみんな走るから私も走る

人くむ孤独の酒の歯にしみし 京都市

草

落ちそうな入歯圧へて陳情し

本 藏 年 最終の列車嵐へ発たんどす アベックへふど先生がいやになり

当然の様にどられたプレゼント 兵庫縣 榎 南

愛情を友の弔辞に叫ばれる 秀才として学び先生として終り

姑が考え直して折れてくる 大阪市 伊

Ш

そのキッス待つてミガムを吐く女 教養を見抜かれまいとする無口

大阪市

金詰りピアノ賣る人買える人 再婚をする氣ではなし賄婦 あの頃が華やかなりし置炬燵

二号亭今宵は何を煮る煙

岡山縣

高

山

朗

笑

三人で書いた恋文とも知らず 秋來れば冬が氣になる暮し向

島

兒

も少じは肴の欲しい下戸の膳 金にさへなれば理性も忘れて居 岡山縣 Ш

岡山縣

步

不機嫌な社長さかさに判を捺し 伸びるため屈し屈したまゝとなり 欄干に落選候補の名が残り 本家より一日早く鎌祝い ネクタイは何処へ落ちたか梯子酒 ネクタイを直して上げたらキッスされ 良心に還つた時は無期徒刑 岡山縣 服部 九

平

ストリップ商品化した乳を撫で

吉岡温泉ニテ 尼崎市

長谷川

Ξ

司

夏

六

丹前に着ぶくれ妻の膝まろし 山の温泉のバスすれし、に柿の熟れ

酒キツス恋のサンブル議事堂の灯 同情に縋る義足が恐く見え 西宮市 田 辺

由

布

宫

素人の恋もきれいな京言葉 情慾がチラリ金歯の奥に見え

老妻は愛し二号は可愛がり

き

姑病めば嫁はりきりて指を切り 肩で風切る元太尉落選し 大分縣

文化の日借金取りの蒙啓く 嫁貰ふ時に役立つ博士号

乳を吸ふ仔猫化けさうな顔でなし

右

流感へ枕並べた子の喧嘩

貫

仁術は死にたいものに息をさせ 心中に誘ふた方が生き残り 弁当の包の鞄今日も抱き

蟷螂の斧であつても振り上げん 大阪市 足 立 春

飯を焚くストであろうがあるまいが 美しさは唯若かかつた丈のこと 人生は樂し湯豆腐つゝくとき 蛇握ることで結構飯が喰へ 大牟田市 中 五.

どこからか坊さんライター出してつけ

### リレー随筆 狂句論の再 2

### 石 原 青

龍

でなければピンとくるものができ 8....そらいうことになるかも知 ないんですれ。 るとごうしても狂句になる。狂句 るものはほんとは狂句ですよ。時 は……いま一般に川柳と呼んでい 事をよむとか、社会説刺とかにな

名はぼく、一方は川柳時を説いて でもなりましようかナ。 ともに招かれて宮城縣下川柳大会 を主張する当代のニクマレモノ、 番頭、他方は敢然として川柳非詩 忠実かごうかは? し柳様寺の大 やまない(実作がはたしてそれに とコマである。日は大谷五花村、 東北本線仙台への、車中の談片のひ 看板を外して「新狂句」の元祖に れませんね。ヒトツぼくは川柳の からひるつたものだ。 へ出席する途中での気ましな放膝 みぎは一九五〇年九月の末日、

らの川柳復興運動において、はど た。明治の中ごろ、久良役劍花坊 ち、その当時は区別をしなかつ 治初中まで続けられて来たのだか 句」と呼ぶことを始め、それが明 日いう川柳も四世川柳は「柳風狂 うものはいるかけんなもので、今 だいたい川柳と狂句の区別とい

1

に似た姿をとる場合がある。 の比喩は時に一見言語文字の遊戲 要なはたらきをもつのである。こ という手段が用いられ、しかも重 表現する文藝では、しばしば比喩 な短いことばで複雑深刻な内容を うことがある。ことに川柳のよう いのだが、物事には常に例外とい にもわかる理論で、一應それでよ ムではないしこれは常識的に何人 で当時の彼等の言った交句そのま くの現代的な解釈にもとずくもの 作品を川柳としたへこの説明はぼ を狂句として排斤し、内容におい でのおもしろみを目的としたもの 品の主体を言語文字の遊戯……主 はいえないと思う。すなわち、作 は正しいにしても、完全無欠だと とが主張されたのだが、その主張 て人の心を打つことを目的とした としてダジャレにおいて、その面 めて両者の区別を明らかにするこ 赤白の風に黄河黄をまもる

する作者の判断を表現したツモリ 民族の根本思想の根弧 さ……に対 つの世界の対立の間における黄河 交明の偉大さ……したがつて中國 この句は現前の赤色と白色との二 (石原青竜)

ちそのような新部門を創設するの は事メンドウだし、表面はともか

――インド代表活躍。

得ないわけである。だが、いまさ

任何」と呼んで一派を主張しなけ ば、ほくはこのような作品を「新 何を狂何だとして排下するなら る狂句でなく、いわゆる川柳の一 するためにいちばん適切だと考え ししろさを比喩に用いたのは、そ 自信している。赤白黃の配合のお 種として存在を主帳するに足ると と非難するむきがあるかも知れな たからである。もし人あってこの れがこの内容を短いことばで表現 しであって、その点において単な はあくまでも、内容へ中國民族論 定できない。しかしこの句の主体 さにもたれかりつていることは否 るが、その文字遊戲的なおもしろ い。しかも作者は第二義的ではあ

句だというならば、ぼくとしては その場合、それは川柳でなくて狂 る。前川五花村氏の言も彼自身そ 法の必要にぶツつかることがあ いきおい「新狂句」を立てざるか れを痛感しているからであろう。 ぼくは、表現上しばしば狂何的手 を発揮できるものは世相ないし社 そして川柳によつで最もその機能 会闘刺でなければならぬと信ずる いて川柳の受けもつべき役柄…… は無い。しかし、現代文化面にお の場合、狂句的におちいるおそれ 生活諷詠の詩と限るならば、多く 川柳を單なる「私小説」的身辺

る象徴的な比喩は「狂句だて」だ なのだが、赤白黄の色の配合によ うなものをすべて、川柳と呼んで 社会だけのものにすぎない。 げくように、現代社会は、そのよ ている。もちろん、五花村氏のな めらるべきではあるまいかと考え するものは、ヤハリ川柳として認 く内容において批判精神を主体と いるのだから、この話は狭い川柳

あげてみる。 ぼくの世相社会諷刺作品の一例を ついでに、狂句的手法を用いた

は食えぬし ……「花よりダンゴ」というが、 ど」の歌の文句を借りた 九原則の世では花ばかり「ダンゴ ······「ふる××××に袖はぬらさ 関子よりもつばら花の九原則 男娼の森の美人は夜目遠目 貿易外收入袖もわらされば

襟垢はせめて我家に光るもの 殺人鬼いのちも要らず名も要ら

たのだが。 あるいは東洋文明のウヌボレだつ ……「光は東より」は戦前日本 ……二十のトビラの引用「植物」は 太平洋をこえて光は東より 大部分が「植物」で株主総会

四十六

白のけんかに黒が止め男 - 4:蔣介石一党台湾に逃げる。 國姓爺もごきにパナナくいなら

> 寒 中 御 伺

から、 日本 暑い冬の 0 御健康を祈る の柳友諸彦 寒い冬の ハワ

七十四 まだ生きて居る 飲み足らず ホノル

まだく俺は 飲み足らず

ホノル、 古川魔花

永 田 里十九 布施市長堂

二丁目二八



てにして待つてゐるのであつ のはかないものう賣上げを当 ど見えて、年老いた母がそ いくらかは家計の足しになる た。虫籠一杯の蟬であれば、 ころへ持つて行くど、それが 入れで、 夏の蟬ど、 蜻蛉の類を採集した。殊に真 から秋へ掛けては、蝶、蜂、蛇 を助けてゐたのであつた。夏 て、それを賣つて、家の暮し はない。実は私は輝を集め 一厘、二厘で賣れるのだつ 蟬などを捕つて遊ぶ年頃で 頭も十一と云 町方の子供のゐると 秋啼く虫をは書き

うである。 店職の無さは云へ、子供の も聞えた瀬木権大夫が、いか 採つて來る蟬や蜻蛉を以つて ども思はれぬ落ちぶれや しを立てゝゐるなど、事実 何時の代にもある

ある。 あつた。神主もその事情を察 うな悲惨な境遇に陥れたので 收しようとはしなかつたので したればこそ、私の虫籠を没 変革は、一部の人々をそのや ことながら、彼の時 の社会の

さうして洗へば洗ふ程汚くな ころへ汚れを廣げて行くばか べつたりを汚れが着いてる 鳥鸛の洗濯に取り掛つた。 が流れてゐた。私は川の縁に には幅一間程の清い浅い小川 出した。境内を囲む玉垣の 着き、泥を掛ければ泥が着く、 りである。砂をまぶせば砂が 水で押し揉めば、唯新しいと る。鳥黐は水に溶けないから、 私はこそくと境内を脱け 白飛の着物の裾に、一尺程

なつて洗濯してゐた。 でに半身を水に浸り、夢中に つてしまふのだつた。私はす 丁度その時、 そのあたりを

と云つた。女の癖にいやに横

あつた。貧しい中でも、不断

私は水の中に浸つたまゝで

覗いてゐたやうであつたが、 暫く岸に立つて、私の所作を 参の女があつた。女たちは、 通り掛つた、 まつたからである。 私の蟬籠を、搔拂つて來てし の子が、路上に置いてあつた た。それは連れの中にあた男 ころで、急に問題が持ち上つ つて、凡そ十間と離れないと 数であつた。女連れが立ち去 きかない、異様に緊張した人 女連れに似合はず無駄ローつ 氣が付かなかつた。一行は、 私は覗かれたことには少しも 四五人連れの社

る岸のところまで來て、 來た。女は、私の洗濯してゐ 譲つて貰へないものか」 つてその方を見るど、 と、声を掛けた、振り返 のものと見えるが、あれは 疊み掛けるやうに、 一人の女が直ぐ引き返して・ 「もし、小僧さん」 「其処にあつた蟬籠 いきな は、お

れが何者であるから直ぐに判 掻拂ひの悪戯つ子は、雪白の 提げて得べ、としてゐる、その のではなかつた。殊に虫籠を の風体は、一見して土地のも 顯の公達である。私には、そ 水兵服を着た、紛ふ方なき貴 の群をも眺めた。それらの女 私は目を上げて女を見た。又 柄な口のきゝやうであつた。 十間程先に立ち止つてゐる女

つた。私は云つた、 費はう」 やる。その替り名前を云つて ものなんだ。だが只で吳れて 「をばさん。あの蟬は賣り

るのは口惜しいやうな気がし やうでもあった。名のない町 神主に强ひられた竹箆返しの てしまつたのである。 げて來たので、思はず口に出 のある者に默つて持ち去られ た。それがぐつど胸にこみ上 方の者なら是非もないが、 名を名乗れどは、今しがた

たのは若い婢であつたが、思 さりとて独りに主の名を告げ ない雰囲氣にも感じられた。 あつた。僅か二三銭のことで た方へ駈けて行つた。 案に余つて、又小走りに元來 はあるが、錢では解決のつか か、相手は更にそれが問題で 錢を出すか、名を告げる

節はいっての不調和さが、一種

小薩張りしたなりをさせられ 南の小路東入北側

ひ、その髪の上から、薄紫色のは、髪を日本風に桃割れに結 女の子が立つてゐた。女の子

がたう。名前を云ひませう。 「くは様に蟬を吳れてあり あどけなさは微塵もなく、に立ちであつたが、子供らしい

こりどもしないで、

のつんと高い、みめ美しい顔 の高貴な氣品をさへ添へ、

艦

阿館

東三軒目

上六キヤピトル映

品料理と生そば

グリル

千日前大劇ーツ

るたのだつた。 てゐたので、その飛白も生憎 げるど、十二三ばかりになる つのが感じられた、ふど見上 に、物音もなく人影の下り立 なり、尙懸命になつて洗つて 私は着物を脱いで猿股一つに まみ洗ひでは間に合はない。 り大きくなつて居り、今はつ 大変である。汚れはもう可成 た。蟬などよりは着物の方が と新しい仕立て下しであつ かがて、流れの石疊

うどは意外であつた。 か、このやうな思ひがけない りさうだとは思つたが、まさ 少女の口からその名が漏れよ やうな衝撃を受けた。てつき と云つた。徳川といふ名を聞 徳川せつ子です」 私は電氣に感じた

が、後には藝者と情死して世 服の弟はやがて伯爵さなつた なり、又くはど呼ばれた水兵 に騒がれたりした。 この少女は後に侯爵夫人と

將軍の姫君である。幾世紀か になる。それを持ちてたへつ 体がへたばつでしまひさう 手足もおのづからすくみ、身 れてゐるのだつた。その故か い臣隷の血は私の身体にも流 なく代々高禄を食んで唯辱な つ、喘ぎながら、 い恩願を蒙り、何の動しも どもあれ、やんごどなき前

踏みにじつて前進しようどす に燃えてゐた。 る、年少の客氣も恐らくすで めであったであらう。過去を み返したのも、新時代の目覚 けるものかど、敢て少女を睨 を私は辛うじて云つた。何負 「うん、さうか」

ど少女は云つた。 様に申上げ、御褒美をどらせ いゝえ、名をおつしやい。上 「僕の名を云へどいふの 「お前は何と云ひますか、

は鳥黐のやうである。鳥黐は 水で洗つては落ちないから、

に云ふのだつた。見れば汚れ

増があつて、私に数へるやう に、又少女にも聞かせるやう

んかいらんもん。」 「い、いやだもん」 「いゝえ」

たが、ばつを赤くなつた。負 が、呂律も廻りかねた。少女 新時代の血ははや流れて居 けじ魂と云はうか、彼方にも はじつど私の顔を見つめてる 私は品然を云ひ放 動作は端的であった。

て、石墨の縁を一段下り、 「それは、わたしが洗ひま 少女は、洋傘をばちご閉ち

て、 は脱いだ着物を差し出さうと 來れば渡してやると、こちら 氣色であつた。おゝ、來い。 と云つて、今にも裾を端折つ 川の中へ入つて來さうな

に立ち塞がつた。 て出して、こもん一少女の前 た二三人の侍女は、急にあわ て、なすどころを知らなかつ それまで、あつ氣に取られ 「いゝえ、いゝの、 5

頻りに拂ひ退けてゐた。 んだ洋傘の先で、侍女たちを その中にも、心利きたる年 少女は、目に涙を浮べ、

> め赚して、二人の子供を引きに來るやうにを、巧みになだ 家へ帰つて揮発で洗ふがよい ・押発がなければ屋敷へ取り

もあつたのだらう。 間神社への月譜での帰りでご 去つた。大方姫君、公達の浅 り、一行は長谷の方へと立ち それでどうやら事が納ま

葵が咲いてゐるところが描か したもので、池の辺りに向日 あつた。庭の風景をスケッチ 墨と、さうして少女が父にね のあばら家であるから、や の額線に入った見事な油絵で 届けて來た。褒美の品は、金 だつたらしい褒美の一品とを がて慶喜邸からは、揮発油一 潮木を云へば、直ぐ判る隣

の名手であつたが、殊にこのあった。慶喜は隱れたる油絵

今は、何の暮しの足しにもな しかし、私の家にとつては、 ものだった。 ふど、まことに隔世の感ある 贈物は歴代將軍家の尊嚴を思

の貨物列車?に積み込まれた。

のことをも知 には恐らくそ まつたが、父 後に隠してし れ直ぐ神棚の 母は驚き懼

であらう。 らせなかつた

痛。胃溃瘍に…

過

大阪・武田商品工館総式育社

Tを横文字のサインがしてあ んぞう殿、徳川慶喜を認めて つて、尙額の裏には、潮木き れてゐた。絵面の隅には、Y・

たのであるが、これを聞き傳えたい、豆秋監督の指揮下に熱演され バックは瓜平クンが得意の筆を掘 ーは愛論、哲水、春柳の三クン、 が脚色したもの、コミカルアクタ 人」は路郎主幹の名句「三人が酔本社新春句会の余興漫画劇「三 雑岡山支部からの懇望により、 漫画劇「三人」西へ行く 無断上流の大漫画劇「三人」の

らぬ無用の長物であった。

美 ・停電へお佛壇から蠍を借り

日向ぼこ世界を論じ貧論じ 素人にしてはど云うもほめ言葉 朝の空我が家も無事な煙立て 無難作に芒を布いて工夫飯

誕生日然るに酒を縁がきれ

十二月二十六日誕生日

安

Щ 久

留

口紅がうすれサヨナラさよならど 元日をモミクチャにされ帰って來 大阪市 本 絲 雨

雪

### 近 舟

構曳に情あるらしい
生力 第二号風の便りの寢白粉 貧乏を懸す外套黑で染め 生きるのと死ねとの境白湯の味 主人だけ精力つける鷄を飼ひ

背番号湯屋でも好きな箱を撰 伍

健

やけくその人生髯がのびたまゝ 際ざめの密柑女の金で買い

郎路

持

駒 \$ か

徒

手

空

拳と

妻を子を

和二十五年十一月十日妻他界

0 は

朝

艘

かなりけり

同

同

何

b

さうに曇つた多の海

同

能 0 儀 所 弱 所 6 で 4. 近代設備とやらになり さても子供に握られて 世 間 智 騙 す涙 見せ 布 哇 淹 純香

小倉へどち 芳泉 院童 生 米ヘンの二号になつて親を呼び あいさつもやつばり京は京らしく 子 金 兄 大 共学もそろ~爪の化粧 まだ生きる氣か御隠 山 集金の 台 母の日に來た御遍路えお茶をくみ 父ちやんに乳がなかつた目を覚し 惑うころへ女房でう調 男とは何とか言うて猪口を持ち 秋 つまづいて以來の酒で死ににけり 本は子のなすまゝにみかんの木 電も 務 はか 供 言う 活費きけば大きなホラを吹き 風 年 主もう の字に腰て敵多き身を意識 魚 彦と遊 紙 嫁 使 よ母のない子をよけて吹け 署で見知らぬ人に加 鉢 好き和尚も椎を拾ろてやり 0 平 男 T また停電を歯痒ゆがり く相 0 貰うにブ あ 使う敬 默つて針を拾うなり んでいては母を呼び つえ 氣な額も氣にくわず 向 世 隣 帶 5 果 で借りる生活費 死んだ妻の名も 翼 0 1= 側 ギを唄 語 なる U 煙ること 0 居の へ寛 b 生 はされ 花の種 雁 秋の景 勢され 律 など 大阪市 貝塚市 和歌山 兵庫縣 愛媛縣 愛媛縣 尼崎市 同 津田 長宗 村上 同 田村 同 木村 同 同 同 同 同 同 同 静岡ちか子 司 千舟 旭童 孤峰 草々 桑甫 白鬼

ら、その頃天満天神東北の隅で一家五人で

四五才の天満の親戚のものに問合せた る。それは何かわからなかつたが、 ウイタウイタ、ナンダベコチャーラチャー

スチャラカボーコボーコドンプリパツチャ

明治廿六七年の頃かしらボクの子供の時 スチャラカの飴賣ばやしなつかしみ 飴賣や笛噺から紙劇へ

田

右

聞

(2)

ラ、という様な歌をよく聞いたのを覚えて

餡を賣ったものが歌ったのだという。主人

歌い、妻が三昧で伴奏し、三人の子供が

菠

草くくつた薬も錢になり

出雲市

同

施

留

守話だんと堕ちてゆき

セーラーの頃から親に氣をもませ

恋 Ш 銀 思 借 金 病 当

1= 小 飯

飽く 屋に男ば

男

恋

人に飽く女

りの飯が煮へ

借

b

た時

仕

草を思ひ出し

床

0

妻

12 0

前

借

見

破られ

同

金

聖

拂

0 ダ

金し

同 同

H

0

家 支

1 è

畑 .S.

ė 爲

ムの底

廣島縣

黑本

0

訳はあ

な

たの誕生

日

選をし

1:

6

と金を借り歩き

午

0

薬

五寸も長く付けて賣り

つり

待

つあ

0

瞬

間の理髪店

同 同

## AC 64

## 語源探究

Scialacqua poco a poco. スチャラツクワ ボーコ ア ボーコ 之位しか傳わつていなかった。その頃なら こんなことになる、 シギではない。之をイタリア語で綴ると、 之がイタリア語でわけがわかるとしてもフ イタリア人も沢山來朝していたろうから、

している。モット長いらしいが、

た覚えばないが、

歌の交句は右の通り記憶

常に繁昌したそうである。ボクはそれを見 質子になって飴で作った菓子をひさぎ、非

nana beco ciarla ciarja D'ombre bazza ainta (小人の口がペチャベチャ) (カルタ遊びで幸運を助けよ助けよ) チョビチョビ浪費せよ bazza ainta ainta

天 源

金の目立

0

埃へ病みついけ

同

コンパクト

女始

発

隅にゐる

0

1-

回 0

轉

窓

の碧

愛媛縣

ボスターの美女にもたれて待ち呆け

同

人の手が肩にあるペタル踏む

無理云うて妻にさみしく見返られ

父ちゃんでは赤ん坊オシッコが出ぬそうな 地曳網ざぶつを掬つて賣つて吳れ カンカン台鷹揚にして四捨五入

三原市

斉藤

Æ

13 子 奥 見合ひさせられた不平の帶をとく 押しつける訳じあ無いがき押しつける さすが老功諾とは言はず日を稼ぎ 遺 ライベルを創くる技巧も知つてる妓 媒的をさせると趣味がこうじたり ラヴ・イズ・ベスト明治の女強かりま うすり やりくりに疲れた妻の 愚痴ばかり置いて老 損をした日にはづけり こんな顔してゝもかだしや一号です 新 + 情 廣服脱ぐ氣になれば職があり 足 添 軽 樣 五年勤めてもまだ教 H 0 引 未 込んだ集金 な方 帶 より にも中の廣さがにじみ出て は T は 帳 は 手習 愚痴 ない 呼ば T 敬重展を見る 立 な学友も出 元看護 \* T は妻の浮氣も知つて病み 息 夢 敗 だと つたまんまの御挨拶 知 赤 娘 子 夢 0 n 戰 ど三人産んでゐる 重ね重ねて納 6 0 城 夢 0 强 0 先生うろたえる 婦 す 安 肩 颪 へ酒するめられ 日 たみ安かれど 嫁 氣 で 停年迄勤め く見 婆が死 0 2 から さしてゐる 來若返へり T 方が 8 余 ~婆が言ふ 膚 瘦 白 同 撃退し 積られ ふ手付 を刺し 16 んて行き E い年 なし 月 八代市 今治市 大阪市 東京都 大阪市 宮崎市 大阪市 廣島縣 倉敷市 石居 長田 松尾 山 同 同 同 同 同 同 同 同 西野斗四翁 同 同 同 木村千代男 本 口卯之助 葉光 文庫 北雷 愛鳩 高志 塗杖 火 年玉でストリップショウ見るつもの 無 ス 絵 好 思 元 頭 初 初 どりとめもなく好きだったおないさし 0 肺病が死ねば死んだでよりつかず 7 妻 こいつ偉えあんになるぞこかでちにのせ 星を見てゐるに月給がどうのこの もう類みませんわど釘箱の音をさせ を即 一階借りギターおぼえていやがられ う壺 ドロスの未練夜霧に吸ひ込まれ 号さ 意 + きな娘が親切にされ腹が立ち 柱が有るのでわかる露次に住み 0) ざ枕その 接 恋を憶うグラビャみどりいろ ゞ二人だけの歩調で暮れの 0 容 病 ス 0 旦 恋を経てきたるかや修道尼 3 リッ 間 識 カン 7 師 展 P よさ 眼 用 30 して あ -< に社長の犬を撫でてゐた んらしい 成 虚 恋 步 10 ブ世の冷めたさを浴びて舞ぶ 0 思 恋愛時代に見せただけ 野暮 夫炭 んな男に死まで賭け 金趣味をちょつど見せ せり 栄 信 U 愛 えやもめに冬の へん 女待つ身へ街路燈 ば は 3 用 へ盃つきつける 0 などつぎ廻り 女つれてくる T 頭 出 土 からが男の氣 來 見える姫 婚 ば 年 曜の社長室 别 カン 80 25 と云う り下げ 逮捕狀 錯 n 加古川市

芦屋市 高知 市 後藤 山 同 本十 志津 四郎

ら、餡細工の中に辻占の様な紙片でも、はカルタ遊びで幸運を助けよなごとあるか はなかつたという。やはり子供の客が多か 日本語としては意味不明で丼鉢も浮かして いっていたのでないかと推測する。変れる つたのでないかと思う。

## 茂道逝

大阪

市

青柳扇子

仙

ことである。

毎に亭主は「カカ叉賣れた」

と云ったとの

### III 久 留

立された句碑の写真ハガキ、 された。それは去年岡山縣弓削町駅前に建 逝去に対しての悩みに、ありし日に漏ら ら辞したとか、私が十一月二十三才の長男 この句を华折に揮毫した。 が金沢え曳杖した時、 は路郎氏の正月吟である。三、四年前同氏 て極端な神経衰弱に罹られ、当時の勤めす 「ごの子もごの子も息災でお元日」 然し廿幾年前長男ロンドン君を喪はれ 宿(西本三笑居)で 私の印象 深

貝琢市

東

初奈里

同

同

荒尾市

蒲原

元祿

も思ふことである。然り私も「俺に似る の子煩悩の句作である。この作の内容は誰 「俺に似よ俺に似るなと子をおもひ」

京都市

若狹

狂風

岡

市

発出

菁也

具塚市

上坂

朱人

ていた。 れ、歯の その長男 な」を過 なった。 ばならな を迎へれ しい元日 やうな他 ぬけた に先立た 分に有っ い運命と 富級化粧料容器には断器工 大阪市大管照長物 西流一丁自四萬山 銀 株 式 會 社

吳

市

史球

同 同

同 松永

同

恩池

彌門

3

h

に孫を托せばギコチなく

石川縣

光郎

冷えきつ 朝 お向ひの紳士も 夜 面 田 + 田 悄 朝 匮 E 本 脫 世 布 醉 住職は差されただけは飲んで乾し 飲んで 氣がゆるんだ様に熟柿が落ちて來る 汗だけをほめて課長はすつと行き Ш 女 晤 まてまてと拡大鏡を出してくる 舎者に成つて橋筋に立つてい 二月 影を抱 形ならすぐに書きます金詰り うてし うているふりして割勘出しるせか 然 告 鳩 魚羊 りへ來てアベックの嬉しくて 3 には惜しい美人で牛を曳き 塔 0 から 日 1 ٤ 3 0 機 6 大阪にて くの醉 座 C もう毒 かい 仲 T いるからど金策日を延し =+ た舗道に待つ身ちと哀れ いて 腕 つかくな金のない師走 てず放浪まだついく 腹のたつよな意見する 力が盗 間 鼠 もうて ŧ 步 年 な をくまぬは損の様 T 賣つてる狩猟 0 は ガムをかんであた 再婚あきらめる 一日 ね來る人もなし 3 土工としての顔 ないど妻の眼が 5 嫁 n 人よ みさせるなり るに か 皆偉うなり 0 家 増えた音 見が帰り 師 感心し で居る 走 風 出雲市 東京都 石川縣 大年田 丸亀市 愛媛縣 愛媛縣 愛知縣 吳 大阪府 神戶市 足利市 兵庫縣 德烏縣 市 余頃 新谷 梶本 馬場 竹田 米沢 宮崎 村上 新海 赤木 竹原 上島きはち 山 同 廣潮志津雄 同 同 田 梅香 紅兒 陽之 紅山 雲平 曉明 可郎 飯明 吐平 風浪 梧橹

> 落ちそうな眼鏡でエロ本続や居る 時計質に入れて昨日も今日も飲む この年も質屋の世話になつて越し 危篤 距離 は れきりで別れませうと言ふきって 候 親 補 が Fu する キッスなどはしておれず 電 愛 話 氣 雪 てるの をきめた十二月 が積つた話もし かこの人年 は娘です 賀狀 鳥取市 鳥取市 倉敷市 岡 四山源 大家 岩田 岡嶋 野田素身郎 同 同 同 同 同 夢成 秀和 芳道

長

母

会 E 立

税務署をやりこめた既ねむられず 共歌 五 廣 百 告 心 学 円 B 0 0 貸してより來の友となり 読 子 瞳 んで子の無い月曜日 は をさける 洋 服 0 吟 七度二分 味をし 東京都 豊中市 网 源山源 井上 松井 水田 同 直郎 蛙声 草骨

町の丁融へ勤

御身分は知らずいづれも晝の風呂 末の ン坊より衣裳を褒める宮参り 買物握つてからのこと 兵庫縣 小林 同 指月

同

年

女湯 合落 赤 優 窦 先 0 0 ^ は 脳 眼 坊やが使者に立つてゐる 座 裏に紙幣の妄像よ 席 大きく物を読む 長崎市 大阪市 山崎 同 同 東 喜久堂 夢路

三面であばかれたのがもう老けた 退廳るのを待ち受け背の子を渡し 0 カン だ多少残 陽 簿の 煙草主食につりがくる れたビクえ身支度少してれ K 近 b く上席 居り候櫛を当て 作り りかえ 萩 岡 岡 心山縣 山市 市 多田 岡田 同 穗波 四案 夜潮

家 鲲 冬 去

ツサンの食パンみんな喰つちまい タキの音妻の感情をそのまゝに n 見つめ T 了 8 て妻も寒う居る 子 供 を叱る声 新潟縣 大阪市 同 喘六 不味

4

0

新たに彼の牛生を思い浮べることよる 前へ生前の好きだった果物でも供えて、 よりも彼が呱々の声をあげたこの日に、整 二月十五日は彼の誕生日ー せめて命日 淚

の師走、舞鶴 次に生れた男の子なれば、珍しく昭和八年 だつたらうか、 來た經飛な姿も、 て、「父ツさん――」と電車を追いかけて てくる。尾張町などに電車内の父の姿を見 いた頃の電影が、最も印象深くよみがへつ た。それを底の独地で練習してのり廻して 彼が五ツ位の時、三輪車を買ってやつ とにかくさきが女の子で、 彼れが六歳を迎へた時分

くにも「茂道 る。何処へ行 する迄は、眼 務の低め、金 ーたものであ い程に彼を愛 の中え入れた 沢をおさらば



時、二男は何思つた? めた。一度「犬」の玩具を買ふて帰った 町へ出て、二男の玩具なご買うことをする 欣んでいた。 悪影響だった第と思ふ? 時代に余り観せたことは、青年になる迄の 々々」と伴れて歩く、 二男が生れたのを、 舞御へ行つてからも、よく父と一しよに 彼は兄として他愛なく 映画などもこの幼年 彼が五才の時、

で持つて行き「水鉄砲」と換えて來て二男の だよ」と直ぐ様その玩具を買つた店へ一人 「ウン平二は猿の歳だから大がキライなん 一彼は七才の春を舞鶴の

之れを見て泣き出

屠 女

蘇 形

祝 背

未知

の前途に希望持ち

姬

路

上田

万

里夫

松 ボ \$

蔦

0

t

IJ

フに

満

座

息

を否

變 廣島縣

知

山太郎

床でひげ

をそるにもどてら着て

變

知縣

0

丈

た

17-

は

カコ

くされ

す

愛知縣

今 刑

日

5

亦

言傳け

だけ

が帰つて來

愛媛縣

木古峰

務 鄉

所

0

寒

n

8

月

3

鸣門市

大塚 佐之

五厘棒

だ有

と云う音で出る樽の

米子市

ナ

おごつた喫茶店

帰銀 湯 火

たついでに見合して帰

えり 女 女

兵庫縣

紅雨 察兒 峰秀

上種田

ラ

专

す

3

股 W

0 6.

形 形

愛知縣 愛知縣

情熱をはぐらかされてそれつきり シ 税務署が居るのに電話また掛かり 血 丹 5 秋 8 未 情 公 英 7 ツクして老けたな思ふボルサリノ 借 良 金 青 また火傷 3 心 足 圧 う二三日待間に 刀 ラリ 報 雄 前 年 雲 を 割 袋 ナスか俺も止めにやよかったよ 0 0 魚 H 0 を 品を持てば持つたであやしま 箱 多 0 代 書 ウ な 0 ネット 信 氣 燒 で 人戻らぬ火鉢炭をつぐ お インドすらり イン 0 疲 h 飲みどる様なのみつぶり 母 3 志三等車にどかで座し 0 請 して 妻世渡りへまつ ない たような気性で左漂され 微 15 煙 じ切 屋 上 < 屑で女 12 どいう字がなつかしい れずつぶり湯にうめて だのが幸どなる年の暮 話 F ズ を 求 草 す が師走の街をかき廻す だ 敷 代 で へ越年資金はこれっほち L 察 れないまゝに逝き 3 3 す b ٤ 密 市 0 1= 忙 房は燃やしつけ 煩悩の灯をせき 程に金も出來 ひ n 柿 0 女に蔑まれ T 柑 民 女 がしくノへ て興 合ひ敵同士 3 は 中に妻の 子が抗 丈 に公約す 10 拒 族 へたり け栄え しぐら 絶せず 無し の宿 議 顏 阿山縣 高知市 熊本縣 大阪 愛知縣 下関市 貝塚市 具塚市 變 米二 大阪市 今治市 间 熊本縣 胸 :11字 知 阪 H 田治 縣 市 府 市 市 市 富田 芝 石川 河楊 平岩寬太郎 津川 藤岡 同 同 米田 柴田 同 同 北 同 延永 坂井 松森 岡 山 本 + 徹郎 旋風 **実**信 醉步 侃流 梵鐘 無骨 竹坊 鱘三 字路 孤舟 青雨 忠美 三 柴 昇. UL 月 17

> 叱ら 誕生日妻もチ どちらどもなく いことを 月 0 か 二月 ŧ 長 出 形 0) 光 0 à ^ 0 余 居 n な 都 0 < 8 宿 を な 病 部 技 5 3 労資たがいに負 く三 ボ 7-道に 市 丹 枕 護 H も買われ社長の鞄持ち ぬ日の食卓を淋しみぬ 知つてる 仕 裏にむ びかりら になった程度の 前 頭 h 身 3 事 飅 親も 変 百 0 台 通 足绞でどこえ 3 並 手 声 です 6 ピリ 六 柄 0) カコ つきを並 負けてる 足 ~ れる赤 祀 + 0 1-位 T け の爪 た如く寝た 否んでみせ わど電話 だ不 金 Fi. 宿 置 主 けどれ ま で切 でくる が知れ 日 任さん 3 暮し向 暮 眠 人子 羽根 岡山縣 出 鳥 鳥取市 鳥取市 兵與縣 兵庫縣 出雲市 大阪 岡山縣 愛知縣 愛知縣 兵庫縣 兵庫 大阪 兵庫 吹田 大阪 大阪市 雲市 取市 沢田 官能 田 牧浦 前田 原 阿部ひろし 大塚 尾崎 太田 原田 池戶 西川 中 つさむ 敬貢 至高 独仙 吐泉 吾柳 右郎 久平

病 外 觀 童 P

+ 恋 女 族

### 社 0 黑 板

委嘱する。 両氏に句会委員を 句会の発展にと 委員の沿員 新に左記

年

鉢に

も貨

郎まかせの餅がこげ

山口縣香蜂改义

1 ブ

b

0

濃

IE 八 2 子 無

東入ル紅ぼたん階 ら五時までー 開所時間は戸・水 ・金の午後二時 千日前連絡所の

春柳氏 瓜平氏 雜句会部

その他入用の品を大阪の店へ注文し、その 登校する姿もりりしく、 成績もいい方であった。 顔は夢のやうに容ぶ。朝なく 中をあけて喜んだ。その カバン、ハンドバツ 学校は休むことな

そこなわぬようにしてくれ給え……」の近 思い出して口ずさんだのは、 迎へに來たことも再三あった。 む父の酔 「他に似よ依に 其後行きつけの縄のれんの店で、 い出の 即氏から「悲しみの余りにからだを 更に うているのを見つけた時は、 氏の御芳情を謝すると共に、 「お父ツさん御飯ですョ」と 頂を書きなぐつた。 似るなと子を思ひ」 路郎氏の名句 その都度、 であ 母に

十一月二十四日)

を師郎路

刊した関山市の夕刊山陽新



雜 尚

感想をごうぞ……… 山陽新聞主催の読者川柳大会の御 にした。話の糸口として、今日の 満年=路郎先生の御來問を機会 に、先生を囲み座談会を開くこと

もに、この新聞の販賣区域

である岡山、廣島、香川三

文 藝としての川 柳を募集 て、創刊の月から毎月読者 聞は、原生路四師選者とし

し、非常な好評を博すとと

弓削平=新聞は社会と直結し、 るのがよいのだと思う。 とにグループで競争的にやってい ツクの大きかつだためと、地方ご 酷いた。これは山陽新聞というパ 貴山 | 岡山縣の盛んなのには全く 貢献し得るようになると思った。 してもらえれば日本の文化の上に 分の生きる上の栄養素として勉强 築より進んで生活に直結させ、自 造もいられるようであつたが、娘 なる娱味として軽く扱っている人 つたと思う。
たど中には川柳を單 く会えたことはまことに有意義だ が、名は記憶しているので、親し 聞柳塘の人にも未知ではあつた で、旧知の人も多かつた。山陽新 Щ

名という、この地方稀に見 席者百十一名、投句百十五

る賑やかな大会であった。

治列車で、南海鉄道川柳会

路郎師は前夜の十時七分

待は大きく、定刻前受付に

長蛇の列を作る盛況で、

出

を開催した。路郎師來岡の 社講堂で"院者川柳大会" 午前十時半から、山陽新聞

予想に刺戟され、柳人の期

ある路郎師と應慕柳人の顔

の十二万は恰度新聞の創刊 に役だつている。二十五年 縣下に新らしい柳人の育成

一周年に当るので、選者で

路即=きょうの大会は非常に盛

合せを飛れて同月十七日の

川柳に飛び込んだのだが、今後と 義だ。私も二十年前新聞を通じて きだと思ふ。 も川柳は新聞と共に大きくなるべ

久米雄=同感だ。 自らの責任であると思う。 き、それに花を吹かせるのは柳人 湖年=川柳の普及に新聞が種を播

大切だ。 ループの仕事として育てることが 仕事だけでは不十分だ。やはりグ 中に川柳を続けさせるのは新聞の 百は川柳になっていない。この連 私が選をした六百の句の中に、四 風來子=たしかにそうだ。きよう

夢を山陽が楽現してくれて嬉しか から川柳に入り、読者川柳大会の る人を選ぶのが大切だ。私も新聞 れ性がある。この中から素質のあ 聽夢―新聞柳壇には一つの気まぐ ようという人が多かつだからでは 因は新聞社がやるからのぞいてみ 教養のレベルが高かった。この原 七面山=きょうの大会は出席者の

> "地方の指導者の資格と行き方" の個性を伸ばするのをモットーと 獲たした。この中で先生は『作家 の問題をいわれた講演が大きな收 瀬年―きょうの大全では先生の るので発展するだろう。 き、それに地方ごとによい人がい 的川柳を川柳としているのがある り刊山陽は路郎先生を選者に載

性を殺し、自分の個性を押しつけ されている。 ているものが多いと思う。 地方の指導者や選者は作家の個

破れると思う。 ないのはおかしい。課題吟でも見 るのが指導者だから個性を見破れ 瀬年―課題吟から創作吟まで育て 吟ではむづかしいと思う。 だ。創作吟の指導をせれば、課題 個性を見破れるかごうかが問題 と面山―地方では課題吟のみで催 しを行っている。課題吟で作家の

が、四十人、五十人となると不可 七面山川小人数なら個性がわかる

個性を見出すより雜吟の方から見 路郎□一般的にいって課題吟から 出す方が樂だが、課題吟からも見 くい点はあるが、要は指導の方法 吟でも作家の個性はわかる。 風來子=句報が出るのだから課題 弓削平=課題吟で個性を伸ばしに 何にある。

って私の机の前え出て來させ、 ていたころ、課順吟を一つづる特 がが坂クラブの川柳器座を指導し 導をしているのがある。かつて私 灰点と特徴を指摘するという方

ずれからも個性の出ないような指 のを作らせるため、課題、雑吟のい ころが指導者の中には概念的なも

ようでは指導者の資格はない。

窓図に適正でない場合にのみ直す 路部=添削にあくまで字句の違い べきだと思う。このことについて によって修正しない。つまり のみでアイディアを選者の意図 詳しくは拙著「新川柳講座」を読 イディアを表現する技巧が作者の

大きな面では川柳と狂歌またわ俳 瀬年=先生の御意見で意を强くし 路郎―そうだ。教育でも多数を指 もよいのですか。 た。小さな面では助詞の使い方、 がすぐれているのと同じ理屈だ。 導するより松下村塾的なものの方 七面山=そうすると個人指導が最 んで貰いたい。 職夢=川柳にはやはリテクニック での個性も伸びると思う。 品は伸びるし、人間的なよい意味 で、長所、欠点を指摘し、された方 法で指導したが、今日川雑で活躍 合添削か指導か、ごちらをとるべ 異る場合も多いが、このような場 が要り、一字違つたために感覚が もこれを素直に受け入れくれば作 ープが可成り多い。岡山でも句会 している人々で当時の松坂屋グル のみに終らず、誰かど指導的立場

貴山=大阪の某新聞でトンチ教室

出せる。作家の個性が見出せない

を通じて直結するのは非常に有意 陶冶の詩であるから、新聞が川柳 川柳は先生のお話のように、人間 柳も社会と直結している。しかも

ず、いきょかも疲労の色さえ見せ 金に微暖の苦行されたにからわら

新聞社の自動車に迎えられて

かすぎて同夜は一睡しされず、発 まで柳談に耿り、ついにお茶を飲 入られ、湖年、茶々と午前三時 岡山支部になっている満年寓居へ の友淵貴山氏と一緒に來阿、川雜

陥らせるものがあった。 講演は、洞場の出席者を胸酔境に に午後は約四十分にわたっての大 「新聞」の選をされ、さら 六百数十句にも上

閉会した。 張した雰囲氣のうちに、 よび選者の短册が贈られ、終始緊 天位に賞狀、天、地、人に賞品お 大会は兼題五、席題三各題とも 午後三時

原羊術館、民藝館なごを見学、小 向い、木村千代男氏の案当で、大 費山氏とともに天下の三公園の一 型別は健やかな気色のうちに起き 指導の名言を吐かれて寝につき、 の更けるのを知らなかった。 有志十余名が集まり、路郎師を囲 んで川柳四方山座、談会を開き、 て、この夜はお茶を飲まれない。 門弟たちに囲まれて、大いに柳界 後樂園に散策ののち、倉敷市に して、満年、風來子の案内で、 路郎師は前夜の苦行を警戒し 閉会後、直ちに川雑岡山支部に 十八日午後四時半倉敷

大会に於ける 路郎師選の天地人句 兼題「新聞」

発の急行で帰版の途につかれたの

(藤本満年記)

古新聞無敵艦隊遊戈す 官廳は新聞にまで判を捺

型紙になった新聞拾い読

は違う。とあった。 川柳と俳句は雙生兒だが、 機氏の文中に、俳諧から生まれた 句との違いを認識すべきだ。山南 行き方

路郎―勉强は死ぬまで続く。川柳 選者はもつと勉强すべきた。 いうことを知らないのさえいる。 柳が新しい川柳だと思つているの いるが、全くナンセンスだ。ひご 最近の人の中には俳句に近い川 のになると川柳が一呼吸詩だと

る恐れがある。 るが、選者で勉强が足りけなれば が廣くなくてもすぐれた句を作 單に作家で選者でなければ、視野 残したい仕事をおくらせる。もし こういうことをしていると自分の なごえ出席している多忙な身で、 れこれと考える。雑誌や選や句会 いる人、映画館の建築まで見てあ に行っても内容はもちろん、來て 歌舞技何でも見に行く。映画を見 何に難しいかを思うからである。 と思っているが、これは選者の如 私は選者をやめさせてもらいたい 勉强すべきだ。特に選者として起 は駄目だ。書物や世の中を通じて を見て人の句を味っているだけで よい素質の芽を闇から聞へほうむ つのならなおさらのことだ。最近 この歳で、映画、音樂、新劇、

を指導してくれるだろう。と考え てみたりする。 解してくれた人々によって後輩 私が死んだら私の書いたものを

風來子=川柳塔十二月号に七面山 呼して見たい。 覇年=この地方の柳人の作品を批

> というのがあるが、女を二つダア 氏の句で たかりと結んでいるのはさすがに 点、雰囲気をよく出しており、冷 らせ、二度目を仮名で書いている 女をんなを褒めて冷たかり

な句だと思います。ちょつと恐い 非凡だ。 茶々=鋭く女の心をつきさすよう

> 久米雄―― 笑泉氏の の句は確かにすぐれている。 満年==七面山氏の肉体川柳は多少 マンネリズムの感にあったが、

> > 句の軽さがよいと思う。

九坡=風來子氏の

つゝましく生きんがためのトー

いているという位の意味で、この

のは何度もめくつたので手垢がっ

ような.....

旅なれた膝に古びた時間表

けている旅で、古びているという ているのでなく、各方面を股にか の句を推奨する。この旅は通勤し

風來子=満年氏の

お化粧の香をふり撒いて傘は行

ンの学がたしかにスマートであ

済ますという感じて、トーストバ を提出する。時節柄配給のパンで

り、生活が出ている点共鳴する。



師郎路の中演講はる

刊創聞新陽山刊夕

だ。傘を通してお化粧を感じる点 に勝ち過ぎの感はあるが頂ける句 行くというのは多少大げさで技巧 の句を提出する。ふりまいて傘は

筆の先ですらく出た句で満足し 園來子= ルトーストパンルの句は 九坡=少し句主の意見を…… いるニュアンスだ。 丈夫という最低限度の生活を て ムましくてもカロザーの点では大 ていない。たどパターをつけてつ

てからいいます。 七面山=僕はもう少し意見があっ

坡九=女をんなと使っている句 見せないという女の特徴を除った しくないと思つたが、傘をさして 満年―私の傘の句の中の女は新ら いる女は人の前を通る時には顔を

性格を出したつもりで、上の女と 妓、婦などの字もあるが、字体で 七面山=女に四通りの字があり、 (一八頁下段へ続く)



### 史 ]1]

# 田

うものゝ古代社会の残滓が濃 生活風習にもあらわれる。 引おこし、叉幕府を中心とし 厚でこれが色々のトラブルを て武士の結束が强く、武士の 平家琵琶制世に何か通じそう 珍客の座にだけおいてある器 流鏑馬へ恥しそうな市女笠

一)源氏(10-1三世紀

(1)

さかのぼれば院政、

武士の

## 四一宗教改革二三世紀

へしたにすぎないからである

延長であり、その轍をくりか 建社会。平氏はむしろ藤氏の 鎌倉開府を以て境目とする封 起源にまで、だが普通輻朝の

人のものたらしめた。 の禪宗も佛教をして眞に日本 南無妙法蓮華経も又大陸傳來 の浮土眞宗をはじめ、日蓮の 視することが出來ない。親鸞 宗教の世界も大衆の動きを無 庶民の批判精神と結びつき、 五)日宋交通(一二一三世紀 以心傳心生死一如も師家のこと **売海の佐渡もノスタルジャでな** 鴨川の魚に屍供養せん 平安中期以後の浮士思想は

どの外に明治維新が京都から 都を東京に遷されたというの

と同じ常識的な理由もみのが

治の中心を置いたか。東國が

何故京都をはなれた所に政

(二)鐵倉幕府(開府二九三)

由井ケ洋荒れ頼朝の寝つかれず 頼朝がうてばひどいてくる政子 類朝は地図からまなこ動かさず

原氏の地盤であつたというこ

鎌倉時代は武士の世界とい 方

するのは適当ではない。 だ北條氏の無道とばかり解釈 毎に吹き返えそうとする。そ 切らない古代の息は機会ある (七)公家と武家 (三世紀) 万乗の礼を載して流しもの 計5死にの外華悪を考へす 天平を真似て個性のすて切れず 総仕上げの時水品の眼が入り

陸交通が断絶して以外平氏に がこれが我方の大事に至らな 難関を突破したのである。だ ど決定的な國防線であつた。 大元帝國にしてはじめてこの

惣代がスパイの役をいうける

(三)武士の世界(二二一三世紀)

獲り入れの秋は長刀かけたまと

菅原道眞によって公式の大

痩せても馬錆びても太刀にある

兵糧米という御年貢も武士らし

も明瞭に見ることが出來る。 上のみならず文化藝術の上に るようになつた。それは経済 もにいちじるしい影響をうけ 鎌倉時代には禪宗の輸入とこ よる対宋交通が復活、さらに 帰化をする腹は京都についてか 造施計盧山に似たる石を積み 日本の港々でするわかれ

(六)東大寺再建 (二二世紀)

るの 造形美術こゝを中心として集 新らしく天竺様を以て再建、 源平合戦で失はれた大佛殿は のためどいうことであつた。 安宅の勧進帳は東大寺再建

の斗争が承久の乱、それはた 失われたと雖もまだ失はれ

(八)元 寇(二三世紀 ひまつましの写経もあきて島の春 一葦対水、朝鮮海峡は殆ん

> ずにいられない。 侵略をあえてしたことに帰せ とながら、彼が侵略のための かつたのは武士の和もさるこ 黄金の夢ジバングの夢はかなし

元冠以後不征國には手を触れず 石農のあと北風が吹きすさび

九)御家人(二二一三世紀

圧迫されはじめる。 けて來た高利貸的商業資本に ち鎌倉幕府直轄の武士の打撃 は大きく、ようやく擡頭しか ぐらつきはじめた。御家人即 社会は元窓によって根底より ようやく出來上つた武家の

七面山川やつばりそうかなー

ノにしようとしている。(笑声)

一同 ―それは余りにも七面山的だ

幕府よろよろ徳政とり消され パニックへごう太刀風を吹かす 借金の自由も御家人許されず

一〇農 高時の御相手犬がいるばかり 奴(二一十三世紀)

び上りはしたもののそれは余 農奴という一段高い地位に浮 搾取されることになった。 刺生産を壟断する商人階級に どもに生産力にものをいわせ 代社会の奴隷は莊園の発達と は武士だけではなかった。古 御領守は誰であろうと米が出來 浪人が智慧つけにくる一揆 高利貸資本に圧迫されたの

風來子=たじかによくでて成功し 下のをんなは種類がちがう。

七面山=ふりまいてた女が男をモ 女が癪だから特にふりまいてと書 瀬年=傘でかくして顔を見せない ほのかに何わせる手はなかつたか あるが、少し大げさだ。もう少し いる。というところが川柳的でし 聴夢―満年氏の句は"ふりまいて 感情を強く表現したのだ。 たわけで、傘の中の女を見た男の

瀬年=ではこの辺で…… く川柳のおかげだと喜んでいる。 りやすく、もう疎開者扱いされな と直結しているため人の気持が判 同志が集つて川柳会を開き、生活 が、できるだけ生活と直結した川 扱いされ、内心実に不愉快だつた 疎開し、それから長いこと疎開者 くなり、楽しく暮しているが、 柳をやっているため、最近は が、私は現在の土地へ二十一年に 鐵見一生活と直結で一言いいたい たものがあるな 瀬年―しかし川柳は生活と直結ー

藤本茶々・津田耕水の諸氏 友淵貴山・大森風來子・丸山弓削 出席者=阿生路郎師·淡田久米雄· 福島鉄兒·延永忠美·榎本聰夢· 分級郎·黑田笑泉·安井大甲帽· 平。鈴木九坡。直原七面山。山

(司会) 藤本湖年 十二月十七日

代議士になって洋館塗り替へる

館へお図なまりが尋れて來

## The state of the s

館 洋 井 寺 吟題課

洋館の正

午う ごんやの組法被

亭

洋

館

のピ

再 雨

婚

re

宿

洋館の人も

先

堋

の代になって洋館建て増され

の萬に夕陽がつきあたり

洋 "洋 子

0

子がリーダーの草野

館の奥では三味の音がきこえ

直 美 華 無 ŀ

伴 洋

> て 0 è 0

遠しを走る汽車もよし

H

兩

楼

館 館

۳

7

隣の琴が負け

同

のひる入りかわり師匠來る

誕 和 洋

生

日

0 ٤ 76i

洋 洋 毙

館

0

服 館

ち

2 祖 君 洋新 洋 洋 洋館を訪へばサンマを焼く臭い 洋館はたど名はかりのベンキ塗り 洋 洋館で組母ぎごちなく腰を掛け 洋 館 会 務 館 館 を建 と別 皮 來い洋館だ直ぐわかる の窓ぬくさうな燈が灯り 肚 1= 署もその洋館に困るなり の玄関で靴を脱がせられ ٣ 和 増し近頃儲けてゐ 1= 服で暮らす元華族 IV 八 茶 室 階の隅の部屋 6 ある生活 えいを 十九平 柳 澗 太 吐 曉 酔 北 水 葉

步 車 海

洋

洋館の塵箱

莽

ので更に昭和廿六年度版の作品を 會根民郎氏(松本市)は昭和廿五年 部に藤本満年氏を訪問された▼石 れているとのこと▼隔島鉄兒氏へ 小満梅さんを招かれた。▼古川魔 された。▼中島生々庵夫妻(大阪 館を観せてもらって同夜十時常宅 市)は十二月廿八日夜生々膨居で 氏に迎えられ大原美術館並に民趣 の自選川柳年刊句集が賣切れた 山縣)は一月三日に川雑岡山支 (ホノルル)は日本の小咄 が許を博さ 豆秋氏、 ・小唄の はパンフレット された▼田中辰二氏(熊大教授) 時三十分、今弟大森北星氏と路郎 岡山放送局から肉体川柳に就て放 された。なお同氏は一月十日朝、 師を川難千日前連絡所に防い欲談 大支部幹事)は 送された。▼大森風來子(川雜岡 部通信出張所有線保全係長に榮轉 試演をしたと連報があった▼直原 愛論、哲水、 劇「三人」の関係者瓜平、 つたが会社の方へ新春句会の漫画 秋氏(大阪市)から、元日当直だ 募集されることとなった。▼須崎豆 一面山氏 (岡山縣)は廣島管区本 春柳の諸氏が集つて 一月十三日午後四 翩骨、

> 田國男先生や日夏耿之介博士を訪 士(大阪市)は元旦から東上、柳つどけていられる▼沢田四郎作博 川柳研究会の指導に不断の努力を 三号を刊行、 「G·K」「熊日」

> > 寒

中

御

伺

五醇氏(大牟田市)正 **葭乃女史推薦** 維

神戶市

長

ш

区

五

位

池

Hſ

部年

三十四二六十四

三百六十

一丁目一

ふあうすど

Ш

柳

社

振替 神戶

九一〇六番

泊、翌十八日倉敷市の木村千代男

同夜は調年居に宿 川雑岡山支部で

れた。なお同夜、

楼上で開催された同社の夕刊山陽

周年記念統者川柳大会に出席さ

えられ、満年居に宿泊された。要

七日午前十一時に、山

陽新聞社

午後五時三〇分大阪発岡山へ出張

貴山氏を同件 に出席後友淵

鮎美氏、

放送局の樋口氏、

忘年会を開催、路郎師、

久米雄、満年、忠美の諸氏に出迎

花麗氏

をラデオに利用され、

会

かっ

5

不 朽

洞

大阪通信病院 十二月十六日 ▼路郎主幹は

忘年川柳会

ふあうすとし 実作家必院の柳誌 港 (柳人交徴のベージ) 田

右

都聞

京

洋館へ少しためらうドアを開け 洋館のそんな暮らしは縁がなし 洋館をにらんでルンベン通り渦ぎ 從いてゆけば洋館に住む女なり 母が來て洋館味噌汁の朝とな のメード沢施買ってゆき して洋館に住むそうな 不便な洋館建ち並び 飛び出すほご震れる アノの主の又鳴さ らしの程を見せ 館の初対面 小豆飯 た人 問されたとのこと。 中村 游 斗四翁 志津雄 大西 有锄 松野えいを氏(佐賀縣) 同 鮎 H 忠 鉄 拍 侃 喨 哲 雄 志 新会員紹介 测子 舟 美 兒 流 葉 R 水 津 芳 **迷窓氏(岡山縣)正** 月 仙 氏 **卜占氏推薦** 軸 地 人 佳 佳 佳 佳 佳 天 ·洋 洋 洋 洋 洋 自 洋 洋 館 館 館 館 館 館 館 館 0

洋館に洋酒そろえご老いにけり な表現とを以て、寸鉄殺人、終妙を尚 宇宙をも凝視め、犀利な観察と、精緻川柳は社会禪である。塞物、人間、否 川柳は社会禪である。事物、 川柳大道は廣く遠い。諸子の益々精進 べきものであらればならぬ。 ぶ中に、巳が独自の志向、見解を含め 画像のある洋館で嫁きおくれ も一次書の人生のみでなし ٤ 0 1= 0 1= 脆む者に、絶対的領得を與へしむ 娘 見合いにむしる壁なし 姉 住 洋館にらみあって建ち 來 お 化 む 3 妹 神 奥 樂 i. 寄 0 様に悩みあり 趣味の違ふ夜 遠慮なく入り 3 附帳は五六人 ぬ犬を連 (館々) n 日澗子 日の 同 銳 鲇 Ш 齊 H 鮎 Œ 雨楼 雨 美 花 美 出 4 楼



可毎月廿五日▼投稿先本社宛確▼開催月日及場所記入▼締結の記入▼締

### 投稿規定 師 走川 柳大會 (本社

十二月二日午後五時三十分 大宝女化

林氏が獲得され、各賞品援與の後盛会程 川雑ならではの感が深い。路郎師の漫談 感心する。 莊氏考案の川柳福引、これは面白いと皆 司会で十七の扉では哲水、栗両氏の名答 頃より大会氣分は最高潮に達し、闘骨氏 行だくで、次々と進行に会念がない。此 を発揮して興を添へられ、続いて紅白試 を魅了された。本月の不朽洞賞は武部香 も堂に入って、他の追随をゆるさず消場 に満場ごつと欲声を上げて次へ移る。竹 歌は白組に上がつた。進行係の晴峯氏も 勝敗はジャンケンで決めるなど面白く凱 得点を競ふ事しばしついに同点、最後の 合に行司設乃女史の厳選もなんのその、 三司三氏の吉例の一幕に、その声優振り ともせず各持ち場につく。鮎美、竹莊、 ムに、幹事は天手古舞のいそがしさも物 士の挨拶の後、盛り沢山のブログラ は開かれた。先ず不朽洞会理事長中島博 地なき柳人の拍手裡に師走川柳大会の幕 九五〇年の掉尾を飾り会場立錐の余 企画部の苦心しさる事ながら

出席者一路郎·文蝶·愛論·淡舟·笛

香·鲭美·三司·生々庵。義次。瓜平 ・柳笠・降步・猫美・水林・翠光・白生・北海・獣平・喜久堂・旅風・吉穂

万 閉

豆秋・没食子・古方・きはち・えい 告天子·青丹子·恒明·竹莊·紫香

からだ中目にしてひとつちょろなから

同 妄同

引をしらべる方が一寸照れ

店、一方引だけが残される

雨・花村・貴山・葭乃・梨里 ・二桂・紫朗・喜代・一枝・彦六・綠 太・一石・翩竹・夏六・孤舟・マー坊 野介・貞女・一草・柳清・山風楼・三 春柳・妄夢・小松園・玲之介・志乃布 夢裡・晴峯・香林・栞・博也・蟬々・ を・胡蝶・哲水・史葉・春草・正司 柳笑・いわを・灰兒・陶王・亜鈍・

叱られてゐる万引のなまめかし 方 引の 哀れ 子供のもの許り自 痴美 哀れ 万 引の癖を持ち 背なの見がむやかり万引手が震え 刃引のやつと落ちつく我家なり 豊 はからんや刃引だった線狐 刃 引の 騒ぐ程には盗って居す 電蓋が鳴って刃引ギョッとなり 万万競 万 万 万 大学を出た万引は記事になり 万 さあ一引しなはれと百貨店 万万長 引は彌次馬たちをヘイゲイし 引の春なで無心の子はれむる 引のふと本心にたちかへり 引も 輪の穴うめ万引してこまそ 引も廣告マッチ賞ろて去に 別の能 引の卑しからざる素性もつ 引の 引も師 れもいやこれもいや万引のすきねらう 引の涙に濡れていた玩具 引 引の氣持もわかる十二月 引も賣上も一百貨店 兼題「西引」 を諭す刑事も生活苦 4. 知らず化 騒ぎを残し暮る」街 事へ師走の風寒し 走の顔で稼ぐなり 一の万 引咎めかれ 粧の女店員 麻生 路郎選 哲史 山雨楼 青丹子 きはち 十九平 愛恆 水 貞春香剛 茶 胡 白蓝 翠 拙 論明水葉都 蝶 女草林王 香鈍光朗 介笑

> 万 万引が 芦屋の父の名を言わず 万引は口説かれているように泣き 刃引の今日は紋付き<br />
> 着て出かけ 引の几帳面さは日配つげ 野晴 瓜

胸を病む夫へ慣れぬ眉をひき あきらめて内助を盡す惚れてゐる 内助の功にさんまの日がついき カロリーを満たす内助の灯がこはれ 文化 動章内助の亡妻へ見せたい日 湯豆腐に内助の味がこころよし 内助とも云わす師匠の好みなり ランランラン時々内助すつがかし 死んでから内助の功が讃えられ 表彰の隅で奥さんかしこまり 老い果てて父は内助を口に出し れんれこで煙草を買び出出る内助 自叙傳は妻の内助にちょっご触れ フラッシュを浴びて内助のついましく 銅像の出來たへ内助の功も添 頑張つてくれた女房へお茶を汲み 内助目に立たす平和な日が続き 子を生まぬ妻の内助が寂しけれ 完成へ画 山 口えこそ出さぬ内助えずる感謝 夜も更けて内助のマシンの音も冴え 出 恶 尻にしかれ通して内助の功をほめ 映画など観に行くひまるない妻よ 内助の功泣いて舅に出させて來 鈍妻を他人は内助とほめるなり んとして咲くや内助の寒椿 茶花を前に女房編みつばけ 籍は晴れて内助を認められ 女に内助の功をほめられる 兼題 0 から運が開けた椅子の人 裏の 酒っぐ妻の額ぬくし 妻の小 彼の美しさ 「内助」 像の妻に励まされ 内助を知るや君 鮎美選 告胡史 天 子 蝶 葉 春 灰紫 泵 自 默 孤 妄茶 瓜 種 淡 豆 光草 見香 菜舟 名 平穗司林 舟夢 舟 秋秋天描 4 美海

介鉴平 内助の功権はし婆となりにけり 知らぬには非らず内助へ頼かぶり 十二月内助の功も追つかず いざとなれば内助の妻が强かりと 鮎豆文

月賦まだすまね自轉車盗られて來 首切 ばやきつ」月賦の家へ釘を打ち 娘 もう 月 賦 の 味を知つた服 月賦でもよろしおますと低うなり どうせ月賦でせうこ新築路んで見る その昔月賦で建った課長宅 手切金月賦にしてもとるつもり あと 五 年月賦住宅荒れている 小道具もみんな月賦の新世帶 あの道は月賦をためた店があり 焦げ付きは月賦でよいご折れて出る 女房が出かけて戸賦に話決め つやも程よく月賦とみれぬ京館笥 嫁入りに月賦の道具ゆれて行く す分の際なく月賦づくめなり 今月で終る日賦のミシン踏む 新調の何処か一駄の匂ひがし 戸賦でも買へる暮しを美やまれ 來る月も月賦で買つた痛さ知る この品が月賦ですかと念を押し さっそうと月賦の服が陽をはじき 直ぐ起きてくれる妻からいたわられ 三ツ揃月賦で買うたとは云わず 新聞へこれも月賦かすてきだれ 賦で買うたミシンで强く生き 賦屋の月賦と見えぬ服で來る 賦代 賦とは云はず皆んなを美でませ 賦まだすまず因縁つけて見る 賦まだ済まないるちに質に入れ 賦なら如何と肚を見すかされ 賦拂ひ最終と云ふ服になり 兼題「月賦」 の噂月 稼ぐ三届のミシンふむ 賦も断られ 竹田 小松園 迷 默 陶 愛 豆 野 夏 水 花 青 季 宫 平 王 論 秋 介 六 都 村 子 賛 瓜 恒柳 鉄 水淌季 文 迷 生 博 種 秘選 鉄笛 々肥 明笑兒生兒都年養蝶宮 清也 美秋蝶林 奥様・みかん・お哉暮・注射・火

十日 長尻へはらくしてる 十二月 十二月まだ滞納の市民税 **十二月かつてにきめた歳のくれ** 年の暮れ妻の臍操り出させたり ボーナスをチョビくくれる十二月 子の下駄の新らを揃えて春を待ち 夏服の月賦が癌な十二月 月賦だんれとやつばり喜しそう 働けごも働けざも月賦つき纏い 通学の自轉車月賦とは知らず もうかんべんならぬ月賦の服がされ 月賦だけ残し轉任してしまい 月 月 つまりその月賦が泳ぐ我橋 日賦もうすんだミシンで嫁きおくれ v 十二月ボーナスだけは封のまる 子にだけは何か買ふ氣の十二月 コードもすり切れて鳴る十二月 理立 金しどうなとなれと十二月 談をされても困る十二月 賦きつちり拂つて子供皆遠者 賦代のけてのんでる給料日 れましてんと月賦を断る気 雇へ天気よついけ十二月 もかも手形に定めた十二月 み助の仲間へ交る十二月 二月借金取りも馴れたもの 二月一應欲しいものを書き 東京支部師走句會(東京都 離の下駄やら引つかける ンのままで走った十二月 白試合勝句題「十二月」 十二月九日 財布の口を締め直し もすんで嬉しい十二月 時限爆彈抱心地 於島 野 いわを関 葭 小松園 香幽笛翩花柳春亞三史柳 小博香義 鲇梨義 竹貴女愛 背 春愛鉄 松園 75 非論 美里 次 林王 生骨 村 笑 柳 鈍 太 葉 堂 莊 山 蝶 論 平 郎 也林次

義理の仲馴染まれ子等のママを呼び 借用証書いたこの手でチェック書き 借金をしてまで訪日何んのこと 借金は屁のカッパさとパイオニヤ ミリオニアにひここきなりし借りた合 借金を知らせ度くないエンゲー ぼろくの借用証だが取って置き 金借りて仕入れたなに知らず借り 火鉢の火埋けて妻から誘ふ夜 背の君を待つ間火鉢の火と戯び あの時の浮氣がたくる注射打ち カンフルへ一人は打電しに出掛け お歳暮え大家家賃もだまつてる 三十年お歳暮缺かぬ義理固さ 金借りに來たさは知らぬ故郷の母 借金を戦後派ですとすまして居 借金を忘れて走るニューフォード 金が資本巨万の立 金が借金を生む派手暮し 金にまけずに拂ふ腕を見せ 声で云ふ借金は高が知れ 成 いて食つて借金殖えて行き 金はわしが排ふと子供競ふ 金に通ばれ嘘云ふ日の多し 借金·馴染 日 からに昔馴染と瓜 の野望空しく借りた会 十月一日 り会ふた馴染の若々し 博士夫人で会ひに來る 淋しい旅の宿で会び 妻 も 臍 繰出してくれ ウイロー社川柳大會 於 東 雲 81 須美惠 加波羅間 津々見 なる女 旭山人 快夢起 高好 不守一好 法 莊 花魔 子米 4 (=)風水池 毒笛 志郎二夫郎郎二水

一月廿五日

何かまだ馴染み切れない年增と居 馴染なご持つ柄でない金を貯め それ程の仲じやないよこきを無で あの妓だよ後は小指を曲げて見る うつかりと昔馴染の手を握り あつざりこノーチップで出る馴染客 泉草水 純 曉 流 魔花

王手と打つてみかんの皮をむき もう然は下りましたとむくみかん

賣場奥様と奥様いがみ合ひ

# 竹原支部句會《廣鳥縣》

十二月九日 於嗣尚葉智路居 芳泉報

福引へついうかしくと買わされる 裁判で立のき料までせしめられ くど運が悪いと云って子に引かせ 本宅は貸してだんへ左前 同居でもよいと貸家類まれる 雨宿りするデバートを見て歩き 賞が つとめに聞いてるあくびかる殺し あくび・宿・貸家・福引 残り福引人を呼び 岡山支部句會 富可愛葉和 额 終 鳩路 朗 泉淌

病人がまた病人を信者にし 雄弁な妻へ外変任せきり雄弁に過ぎて真実疑われ 偉らそうにせれば信者に相済るや 雄反雄男美 弁のちよい(手前みそにふれ 弁家愛の言葉に行きづまり 弁のマダム洒場で河井ばり くしく源氏の君は男泣き 会で会う様しみの信者なり 弁家机は叩くものにして 一般の際し與へずまくし立て 泣き超然として上を向き や」としい・易者・音楽 き女がろくくするばかり 敬北 忠三 風大醉 來甲 貢 星 美葉 子 朝 劇 十九平 濒底数北

泣き・維弁・信者・おでん屋・ 於弘済会ハウス (岡山市) 澗年報 本当 易者 0

### 版写謄田阪

二五町田芝区北市阪大

商田

-九九五 島福 話 電 一番一三六五

始末書を素直に出して認められ トロンボも立ち上らせる急調子 ベランダから海油絵のように見え 始末書ですましてもろたカンニング 始末書でよかつた自轉車と歩き 息詰る生活始末書かきなれて 始末書をかいて不安な日が続き 音樂と寄席でラデオを奪い合い 恋人の手前ショパンに足をとめ 音樂に乗らぬダンスを得意がり や」こしい社名標札見て歩き やよこしい名前ですぐに覚えられ オーケストラ母やかましいものにする や」こしい道順下手な地図を書き おでん屋へかいとのちびたのが並び 残りものまけておでん屋店できい おでん屋で泣けば失恋かっ言われ 事務始末書の墨すらされる 生きを易者風情に保証され 始末書・洋館・バイス・選 から帰る途中でもう迷い のなやみ易者にも言えず ない易者に娘そつと立ち 十一万十八日 於美 ら言われた通り貧乏し 貴生 川支部(淡智縣) 秋 夢沙子 大甲帽 十九平 斗總 文 同 四海 鉄 高九鉄淑三 女秋志月 女 兒良坡兒邱葉

選投候 月 約を 票書 補 绺 末 煙 なご何処吹く風の田舎消 者の声もあわれな最終日 心配させて選挙済み 睡気をさます美人が來 近くパイプのいる煙草 パイプは妻へ預けとき 木美木斗美 観 月 人秋人志秋

雅川 小郡 支部句会 (山口線)

十一月廿六日

於

小郡鉄道保安部

井蛙報

月の傘明日が氣になる母娘なり 熱 熱情をそろばん玉で彈じかれる 夜 轉 秀才の友も疑獄に名を連れ 言いにくいことまでいえる友を持ち 化学生 瓶 勤 問 0 栗・友人・月・薬瓶・熱情 さよなら後の再起の日 のまだ住み馴れず友恋し 苗 を煙に吹いて刑事室 0 見見 阴 果があったと派手な声 植 他えて 込違 の一人に目が見え った栗の猫 狸の皮算用 秀 菊 0 淑井政柳 蛙峰昭 丸 即蜂子虹蜂坊

一月十一日 吳 支 部 句 於林野 會 () 奥 甦光居 市

П 口答へ少こうしやけて居る口調 口答へではない返事したつもり 納得のゆかぬ意見へ負けてゐず 藤倉はチョットヒントを白はせる 凡妻のくせにヒントをよくつかる 犯人逮捕セント與へた投書面 支 答へされて盃ピシャリ置き 拂の貴 一任に一人で受ける義理をもち 任・セント・平答・逃げる 任怒口迄と言ひ 甦 茶 光 江之 柳也 斗光

> 古 逃げのびたつもりへ巡査導れて来 來るしき待たせて逃げた夏の雨 + 里 で自分を探す記事を読み へは十五で妻の口答へ 史 千紅彩 浪代兒峰

### 雜川 弓削支部句会 (阿山縣)

心細い 空想・同意・生意氣・自由・平氣 一月四日 於金光教神殿 福島 鉄兒報

**監落**はお金の盡きるところまで 夫 婚の身のいまだ自由は許されず 空想もなくすり減つた靴をはき 逢 御自由の言葉もらってくずす膝 生意氣を云いたい盛りまで育ち ふくらんだ腹で同意を迫つて來 事後承諾有無を云かさればスが來る 御同意を得たいと議長へり下り 同意する腹で一應 金の要る話うかつに同 空想家二階性いで生きてゐる 不同意と云わせぬ見つけっかんごり 亡人心細さに乗じられ まだ帰らず風が戸を叩き え切らぬ夫へ頭りきる苦労 引の場所へ墓場を通って來 縛を求めて鳥屋へ帰る鍵 服も鞄も 手近に置いて一人複る 消 える 意せす 質問し 抽 籤日 弓削平 十九平 ラツキー 七面山市 十九平 久米女 久米女 泉 泉 泉 子 雨 骨 貫 柳

創立一周年記念 姬路支部句會(姬路市)

十一月十二日 於 笑 鬼 笑報 居

渡米して單語もちょうと役に立ち ブギウギも大平洋を越えてゆき 渡米・旅・肩書・恋 同 笑

水 里

0

母

本

紀でロ

答へ

善太郎 朣

葉さらけ出しての口答へ

関体も分かれ分かれの汽車の箱 これが恋かコーヒーを飲むだどけ 恋だろかあの娘退社を待ち合し 名刺交換あわれ肩書見落とされ 子の風邪を案じつ、けたまでの旅 -0 米した土産は何とメイキャップ たこになる程聞いた渡米談 ずきの又肩書が一つふえ 町の一泊國へ便り書き 印象それが恋となり 二燕 和 孤 凡燕凡燕 葉子水 笑笑夫子夫子

## 備前支部句會 (岡山縣)

人・赤い羽根で金儲け・荷物 一月四日 於娛 句 苑 樂居

変り者とう人嫁の來る話 花 花 配 金もうけ上客らしいお茶を出し もうけても赤字の消えぬ家計簿 金もうけ顧客の愚痴に遊らわず 附合のこれなら出來る赤い羽根 募金箱つり銭ほしい額で入れ 凡人のころ不和な灯をともし 冗談を言うておつさんもうけてい 嫁 嫁 滢 人の弱さは神を信じきり 事務机・変り者 0 0 の荷から米粒こぼれ出し 荷物が雨に濡れてつき 荷物近所を空にする 久米雄 娛句樂 柳風子 柳風子 美 秋 穏

### 雜川 岡山縣廳支部句會 (岡山市)

十月廿一日

於

縣廳內世課祭 服部十九平報

0 の柿失敬したい様な霧 鉢な気で來た映画笑わされ 鉢になれぬ気性を淋しがり 棄鉢・霧・忍ぶ・煙突・傑作 夜を咳拂いしてすれ違い 夢沙子 茶々 十九平

+

一月十五日

於日の丸本社会議室

河村日湖子報

B

9

朝幼稚園まで送らされ

F

天

雪・馘首・火鉢・長靴・涙

恩給 傑作も程吏の前にあわれなり 傑作 煙突の 二階 傑作の画をさかざまにほめてある 傑作を残し貧しく死んで行き クレオン回煙突だけの船が行き 橋くぐる煙突少し首をまげ 無作法な借金とりに両手つき 痛いこも言えずアロハをやり過し 忍び寄る貧に背中を向けて緩る 太陽は霧の向うでちょこまり 作 作 みな変れて傑作だけ残り がいと無難作に没にされ 街 前で労資が手を握り 女がたてば娼婦めき 陽の目を浴びる三回忌 煙 近く忍べるだけ窓び 0 突播除に頼まれる 丸 句 會(鳥取市) 十九平 中山子 中山子 十九平 十九平 夢沙子 四 七面山 案山子 淌 忠 美 夢 夢

### TACHIKAWA PEN 大阪市東区豊後町四八 立川商事株式会社 チカワビン タチカワセム

市花

火で揚げる山

仮泊所楼上に於て開催▼川

しは奈良縣観光課、奈良市

奈良市社会教育課、川柳雜誌社

一急阪鉄

電鉄、阪神電鉄、南海電

四日午後一時から市電

鉄道

大阪市交通局、

一月十

二日夕から阿倍

催▼二局三社

恐子血 馘首だつ 意 あ 長 保 長初 長 会 股 3 0 証付きとか 議 し馘首になったらと気の早いこと 見 0 靴 靴 火 靴 雪 0 深う 室 鉢 す L 淚 10 かる 0 淚 3 や涙なが 0 長 3 1: かごうにかなるご力づ 跡 0 要 0 いだ靴 7 母も涙をためてゐる か 靴 6 誤が先のめぐり合 2 内 0 0 言ふ提 VJ 出 7 股 声 1: 会 涙に負 0 してちり 計 あ 税企納めて來 ればえらいこと 10 一つの大火鉢 してまでの嘘 げる 靴 出 雪 0 45 で出 して 執 也 はら て寝る 魚市 踏 勤 吳 務 3 す the 貴 たか 芳 H H 眞 喬 同 游 同 粗 至 吾 美女女 湖 美 道 水 粒 女

自 ウインクを返 自 自 自 供 自 Ĥ 自 Ĥ 惚れも 惚れを持つて生 惚れはエリ子と共 惚 惚れても好 惚 托 惚 惚 れが れの開けてくや が 企 と遊います 惚 十月二十 沒收それでも此度こそ 3 0 の医博患者に教 れ・爪彈き あつたがそ ってニ 1: 息 い非凡さを持ち乍ら して見たら人造 浪 子 四日 度 人を続けさせ 0 かと念を押 n 目の立 話嬉 た額 れが しき開 に撮るつもり 於 六代目 100 かたち L 一候補 がり 票日 南 礼

> 捨 珊

舟

同

あ 來ぬ人を爪 H # 爪 -t 爪 爪びきの座 伊 爪びきは止 弾きの 7 びきの所望の主はれてしまい 惚 だ起きているのか低い三味 ツハツもう爪弾きの 书 n 人の爪は地唄の音を出し すそこのとこがで爪で弾き 離れごうやら寝た複 顏 に容 般をチラと見て通り めようと びきに待つちれったさ 赦の 無い いう仲ごなり ませてゐる おでき 拾 同 無名 鳥 耕

瑞

枝

郎

医南

会区

JII

柳

同

好

會

(大阪市)

額

は

分の

スキもな

眼鏡

同

11

翩

骨

舟居

師

### 春 柳 居 1 集

£Ma 袖

+

一月二十

七

無名

林

同 同

辱 顗 1 に乙 1: 女 える 0 穢 楷 顔下をむき れなき初 毛 妄 風 楊

美術

俱樂部で

JII

維岡

111

社正月句会(大阪

ili

はは

ЛÌ

柳大会を開催

室で一月世

捨 同 同

舟

屈

葉

4

vI

会(奈良縣)は に於て開催して用催 前支部 赤變 雄居で開催▼川森岡 + 111 松公会堂で開催▼すみれ 縣」は二月六日 亭で開催されると▼川 媛川柳大会を開 惟▼川柳あい 新年句会は一 月 句会(廣鳥縣)は一 会へ 九平居で開催 六日開催さ が一般を表現である。 )は一月六日 山脈)は (旧正元 大支部 十三 春社 + 句務 されて 高須 日午 柳壇を設け、 と医院の本館とが十二月十一郎氏(石川縣大聖寺)の邸宅 屋会職 冬十月から「東京タイムズ 市)け峰秀と改号さとれたマ れたとのこと謹んでお見舞申 月一日発行)に「江戸川 部では山陽新聞 (清水市)は全國浴場新

前一

時

漏電のため焼失さ

0 無名林 校郎 林 哲 カ 首 吾 が恋は メラフェイスを心得てゐるプロフイル 阪 ヤスミンのほのかに付ふプ 訳 を 0 阪 引·鬼瓦 + 二月十 神 聞 横 悔なし君のプ ヒル 顲 か ず 火 五 傷した 177 H 11 颜灯 集 п

きんま

美秋論

7

イル

に暗

L

鮎 IJ. 变 闹

(大阪 谷 也 鮎美

報

こんごこそ当る福引子に引か 1: 福 引の 引のスカにぎやかな師 10 瓦 引 を 的 な トラック おなど たりの貧乏にらみ V2 嵐 宿林ほごに積み だと思ふ鬼瓦 つてゆく銀 走 17 世 由 船 柳 司 美 布 司

社後援の下に天満 ▼富士野鞍馬氏 一日日展協發新 柳に見る 開八十二 一月十 支 故人について「傷める葦」を 堺市北長尾町二のともしび社 れている▼故藤原正男氏の会 したが、 柳記録や 頃には再建の選びだとの ため 祝融氏に見舞はれたが X 一生続ける筈であった川 モを焼失され 正男氏の合兄が 残念がら 快 を刊から 一報に接

母 袋 未知 海著 間稼ぎ」を執筆▼那谷

先づ本 山信 聖 日で記を探 知人 書 によ つて

啞三味氏(東京都)は旧

發 行 所 松本市 な 0 大名 III 町七 柳 社

七と改正された▼那谷

谷出

いる

相元紋太氏

毎土曜日に

~卷表 (西

(石川縣)

は旧冬浦電

0

美氏に、敢闕賞(十二ケ月全出席)並に敢闕賞の授與式が行はれた。 與された▼川雜南支部新年句会はは森下愛論、石岡正司の両氏に授 会に於ける不朽洞質 燒川柳大会(奈良 交通川柳大会(大 王子神社で 宝文化会館 で開催され 電鉄)は 観光 柳を 天王 ♥津倉川柳吟社が 月 

五年度の句

a

時半から 六日午後 何会は

本

祖:

新

月五日葉留路居で開催▼さつき川 日に新 開催▼松支部新年句会(岡山縣)は「月一日大家夢成居で(岡山縣)は「月一日大家夢成居で 日久米備 柳むつみ吟社へ愛媛縣、では一日 時雨居で開催▼川雑弓削支部新年婦人句会(岡山縣)は一月五日近藤 新奉祀賀句会一岡山市 二月廿三日服部→ 一月三日 原支部新春

るマ重

H

秀

峰氏(防府

### 編 輯室にて

ないではいられないと手紙を寄せ していたが、 いる。十数年も実際しているK氏送離は夜邏くまで天手古無をして が自分は「川雑」をほめないことに も三十册も注文してもらつた。発 ★前号は大好評で、一人で二十册 とうく自分の信念 今度の新春号はほめ

しくなるばかりである。 在でもまた面接していなのである 的な通信に が、それまではこちらからも箇人 からである。 K氏が不朽洞会に入 数年も既つて時間される筈がない 会されたのは催に数年前である 愛しなければ一柳誌を廿 むちに外ならなかつたの 心の交流はますへ激 一切しなかったし、 斯うした 意で、 3 0

は深まるばかりである。体接を請 るの次け誰? 次は誰?

あ

で出來るだけ碎いて書いた。時々 せてもらった。 倉敷へ出 た時の収穫である。その翌日には 院者川柳大会に招かれ岡山え旅し 旬に、「夕刊山陽」一周年記念の 四方山座談会」は旧冬十二月の中 ★川雑岡山支部で開 彙の解説までもするつもりだ。 の人達にも読んでもらいたいの 大原美術 かけ、 柳評 館や民藝会館を観 木村千代男氏の好 釈百句は作家以 かれた「川柳

燃えた。

燃え溶は 麥

体が、 はこれ等の人達に挙つて全出席組 回 感謝してい」と思う。十一回、 うで案外出來ないものである。よ 席することは何んでもない事のよ ★旬会は私たちにいろんなことを し表彰されなくても全出席それ自 になってもらいたい。 いることを表象している幸福さを 彰した。私も全出席組の一人であ と、十二ヶ月の本社句会に全出 句会で、三回優勝した水谷鮎美君 ★本社の弥客句会で、 の田席者はかなりあつた。本年 森下愛論、 健康で平和な生活を営んで 一年間ブツ通して句会に出 石岡正司の両君を表 廿五年度

> よりも、 れ等ば読むと云う

泉紙にし

最短時

問

で結ぶ

を募る。 「課題吟」

は何人でも投句が

H

en de

STREET, STREET

きな不幸でる。 軽視することは川柳人にとつて大 せてしれるところである。 教えてくれ、真に生甲斐を感じさ 句会を

められてでもしたように愉快で

その第二陣は東京え飛んで

んぎ」がほめられると、

自分がほ

東野大八氏の「くるまだ

随筆の企画は予想以上に

Fx

燃料にさ

院 長

作

m

哲

存されていたので

ð:

かなり沢山保

間韶

選句後の廃紙なご じなかつた。川柳 少しも不自由を感 ちはそうした紙に そんな時でも私た たのであったが、 たり、落し紙にし

每日3往復

60

16.40

員に限る。

0

投句は不朽洞会

H

1発行

特急料金 ¥ 上本町發 7.40 12.40

名古屋發 8-00 13.00

いに期待してもらってい」と思う

なしているので、 强い結びつきが、

今後の

発展は大

「川雞」の根幹を

原稿や版木をカンテキで燃やして うても、戦時中から戦後にかげて 燃料が手廻はらないため、座楽の ★寒さが本格的になつた。とは云

大阪市南区

長堀橋交叉点西·電話船

Ŧi,

〇〇〇番

**西替口班 大阪 七五〇五〇** 

東に向い、伯台の淡夢助氏の手に本号に寄せられた。パトンは更に 石原青竜氏が「狂句論の再檢討」を

> は、油が染みこんでいるので、いつ て來るので弱ったか、版木の方 ぼい埃りとなって頭の上から降っ はない。原稿紙や古ハガキは白つ 暖をとったことを思えば物の数で

までもメラノーと始をあげてよく

うて来ると、いつもあの頃が思い しみんくと感じるのである。 出される。そして川柳のお蔭を、 え代川した位であった。寒さが襲 (路)

かつた。終戦近く で残ったので有難 本炭のような

から、その後えか

夕刊紙の立實え

て、五枚十枚と買 丁あまり列を作つ

求めていた。そ

使用の紙にすら事 けて世間では日常

欠くようになり、

郎(一哲) SALES SEE SEE SEE 

建泛

Made in Occupied Japan 昭和廿六年一 発行所 大阪市住者局區內方代西五丁目二五番地 大阪市住吉局區內形代西五丁目二市香地 行即捌人 和廿六年二 列5号 一ケ年概算 牛ケ 柳雜誌 麻生 每月 柳雜誌社 一月廿五日印刷 册 月一日発行 幸二 金一九八四 金三〇円 回 金三九六四 (送料三四 **掌第** 몽

集

題 吟 募集

P 水 お テル TA 勘 (十句) (十句) (十句) (十句) 木村 吉 F 三月廿五日柳柳 田 田 一月廿五日解初 水 幽 古 夢 車選 方選 王選

每号募集

文章 (評論・研究・感想其他) 斯生路郎近作柳樽(雜誌) 斯生路郎 所氏名雅寺を明記する事。 『折作柳柏』は一般作家の雄吟 稿 規 定 麻生路朗選 麻生路與選 (廿五日編句) め、 住